

モビルスーツですが、
何か？【休載中】

モノアイの駄戦士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、古文の授業を受けていたらなんか死んで何故かモビルスーツになっていた。そして、彼のヤバイ戦いが始まる……

ガンダムと蜘蛛ですが、何か？のクロスオーバーです。キャラは出ませんが、モビルスーツとかは出ます。

気分によって毎日出したり、間を空けたりするので、緩く待つて頂ければ。

自分の他の作品もよろしくお願いします。

目次

episode 1	モビルスーツ、大地に立つ!	1
episode 2	進化と許嫁(意味深)	11
episode 3	ガンダムと蜘蛛のご一行	19
episode 4	猿狩りじゃあー!!	23
episode 5	モビルスーツを溶岩に突っ込まないでください!	31
episode 6	火龍と蜘蛛子の進化	36
episode 7	火龍レンドVS蜘蛛子&バルバトス	42
episode 8	解き放たれる悪魔の狼(良い意味で)	48
episode 9	蜘蛛とモビルスーツは夫婦(予定)	54
episode 10	VS地龍アラバ	66
episode 11	さあ、エルロー大迷宮を脱出だ!	75
episode 12	ゴブリンの村で	82
episode 13	旅は道連れ	

- episode 4 転生者 — 107
 episode 5 ジャスタウエイは
 正義！それ以上でもそれ以下でもない！
 — 117
 episode 6 こんがり肉は魔王
 様にもご好評のようです — 128
 episode 7 無人島での大騒乱
 — 138
 episode 8 蜘蛛子と合流、
 対話です — 145
 episode 9 何やってん
 だああー！!? — 153
 episode 20 魔王アリエルとの
 戦い — 163
 episode 21 革新の始まり
 173
 episode 22 管理者Dの招待状
 — 186

episode 1 モビルスーツ、大地に立つ！

「……………ん？」

目が覚めると、そこは洞窟の中みたいだった。

いや、洞窟の中だろう。

高校生だった俺がなんでこんなところにいるのか……それはわからんが、ともかく生きていくことは確かなようだ。

教室で古文の授業を受けていたのだが、突然激痛が走れば今度は洞窟の中。

全くもって意味がわからん。

もしかして、異世界転生？

なら、他のクラスメイトもしてそうだなあ。

何せ、死んだ時に見たのは閃光弾の直撃をくらったようなホワイトアウトしたものだっただけ。

いや、閃光弾をくらったことはないけどね？

あくまでそんな感じというだけ。

さて、自分の体を確認してみよう。

まず、腕も足も動かせやし、まずは四肢はある。

次に胴体やら頭。

変なことになってなければ良いのだが……

「え？」

見えたのは緑色の装甲に特徴的な動力パイプ。

よく見れば、肩にはスパイクやシールドのようなものが……

「人間じゃないいいいいー!!？」

……俺は転生した代わりに、ロボット……いや、モビルスーツになっていました……しかも最弱のザクⅡに。

いや、どっちかという旧ザクの方が最弱だが、劇中においてはあまり連邦のモビルスーツとは相性が悪かったのもあるから、弱い方だと俺は思う。

「でもまあ、何もない状態でこの洞窟……いや、迷宮に放られるよりはマシか」

幸い、主兵装のザク・マシンガンは後ろのスカートアーマーにマウントされてるし、ザク・バズーカもスラストスターであるランドセルの横にマウントされている。

あれ、武装つてフルか？

ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、クラッカー三個、脚部ミサイルランチャー、ヒートホーク……あ、これオリジンのザクⅡやん。

センサーの類いは普通の光学センサーに熱源センサー。

あれ、でも何であれ転生したなら魔法とかスキルとかあんのかな？

ベタで強い鑑定とか。

<スキル【鑑定】を取得しますか？>

「ヴェイ!？」

急に頭に声が響いてきたよ?!

だがしかし、とりあえず取得できるようだし、知識がないのはこの迷宮の中では命取りになりかねん。

というわけで【鑑定】をお願いしまーす!

<スキル【鑑定】を取得しました>

「さて、あんまり期待はしないけど性能確認っと」

<壁>

「……………」

うん、やっぱり酷いもんだな。

下にある石を試してみる。

<石>

<床>

<天井>

<岩>

色々見てみたが、スキルポイント全部使った割に（後で知った）初期の状態としてはかなり劣悪なものだわ。

でも、なんやかんやと鑑定しているとレベルが上がったので、多分使った回数とかで上がるんだろう。

「ん？となるとモンスターもできて、俺もできるか？」

<MS-06J ザクII> Lv1

名前 なし

HP 100000

MP ∞

平均攻撃力 600 平均防御力 550

平均機動力 560 平均抵抗力 600

平均魔法力 10

スキル

【核融合炉】、【鑑定Lv2】、【武器錬成Lv1】、【n%I||W】、【ナノスキン装甲Lv1】、

【機械生命体Lv1】、【望遠Lv1】、【熱源センサーLv1】、【レーダーLv1】、【マッ

ピングLv1】

「うわ……ナノスキン装甲はありがたいけど……な」

マジでワオなスキルやった。

【n%I||W】の意味はわからないが、多分、普通ではないだろうから転生者の証とかそこから辺か？

ま、ともかく、武器錬成を鑑定……ってモンスターが来たみたいだ。

「……ギギギ」

でっかい蜘蛛さんが足に何かをぶっさして食べ歩きをしておりました。

スキル【望遠】で良く見てみたら、食べてるの蜘蛛だった。

え？マジで？

「……オワタ」

こっちに気づいたのか、顔をこっちに向けてきた。

まさか、あの体で俺を殺して肥料に……？

「うおおおおおおーっ!?!」

そう思ったら、体が勝手に動いた。

今現在、最高の火力を誇るザク・バズーカをその顔面に向けて撃ち込む。

ドカアアアーン！

「ギギイイイイー!!」

「き、効いてる!?!でもまだだろ!」

さらに撃つ。

全弾を使いければシールドにあったバズーカの弾倉を取り外して新しい弾倉を入れる。

「どらあああー!!」

バシユ、バシユとバズーカの弾が砲口から吐き出されてデツカイ蜘蛛の顔面に向かう。

直撃をくらった大蜘蛛は、顔面だけを集中的に受けているためか焼け焦げ、抉れ、燃えていた。

「ギイイイイー!!」

さすがにやられるばかりではいられないと、相手も攻撃してくるが、大きな体な分動きも遅い。

多分、防御力とパワーにステータスが寄っているよだろう。

ただ、あの攻撃を受ければ爆散するのは目に見えるので舐めプはしないぞ。

バズーカの弾の威力が良いおかげか、時間がたつごとに動きがさらに鈍くなり、そして最後は倒れふした。

それまでにどれだけ時間がかかったのやら。

バズーカの弾が切れて、ザク・マシンガンを撃ちまくって頭を重点的に攻撃して、相手の再生能力より先に相手を攻撃を加え続けた。

その内、武器錬成で弾を生成できることが解ったので、核融合炉の出力に物を言わせた総力戦を始めた。

魔力が無限なため、とにかく弾倉を生成してはリロードして蜘蛛の頭にぶっ込む。ただそれだけ。

ちなみに、鑑定したところ<クイーンタラテクト>と呼ばれる個体らしく、とてもヤバイモンスターらしかった。

そりやまた大物を狩ったな俺……

<条件を満たしました。スキル「大物狩りLv1」を取得しました>
なんか手にしちまったわ。

<経験値が溜まりました。Lv100になりました。進化先を選べます>
そりやまたどうも!!

なんとも言えないLvの上がり方とLvに、思考放棄した。

「とにかく、進化先を見てみるか……」

進化先

- ・ザクⅢ
- ・ゲルググ
- ・ドム
- ・グフ
- ・ザクレロ
- ・ジム
- ・ザク・キャノン
- ・ザク・タンク
- ・高機動型ザク
- ・ザクⅡS型
- ・ガンダム
- ・ガンキャノン
- ・ザクⅠ
- ・ガンタンク
- ・ジオング
- ・ビシヨップ
- ・ブラウ・ブロ
- ・エルメス
- ・イフリート
- ・イフリート改
- ・ザクⅡ改
- ・ケンプファー
- ・ズゴック
- ・ズゴックE型
- ・ハイゴッグ
- ・高機動試験型ザク
- ・アプサラスⅡ
- ・陸戦型ザク
- ・ザク・マイン
- ・ツダ
- ・ヒルドルブ
- ・ゼーゴック
- ・アツガイ
- ・ゾゴック
- ・ハイザック

うわ、かなりの進化先が選べるようだ。

まずはモビルアーマーは論外だな。

宇宙ではないので、特にザクレロとジオング、ビシヨップは使えん。

エルメス、ブラウ・ブロもしかり。

狙うならガンダムかイフリート改か？

いや、ヒルドルブも無視できない。

戦車は男のロマンが詰まってる。

ツダも良いが、あれってオーバーヒートしたら自爆でしょ？なので、却下。

アプサラスⅡも魅力が十分。

メガ粒子砲で敵を一掃、なんてできるし。

いや、でもここでサイズアップしたらこの迷宮から出られなくなるのでは？

今は人型の普通の人間並みの大きさだから、その小ささを利用してあのモンスターを倒せた。

ここで大きくなるのはあまり良くないな。

つか、ゼーゴックとか完全に死ねって言ってるだろ。ふざけんな！

さて、
どうしよう。

episode 2 進化と許嫁（意味深）

……………あ

俺は少し体がふらつきながらも、立ち上がる。

体は依然機械で、装甲がある。

夢ではなかったか……

「さて、進化したけどまさか寝ちまうなんてな」

今度進化するときは安全圏でしないと、ヤバイな。

「うむ、しっかりと進化できてるようで」

俺は悩みに悩んだ結果、ガンダムにした。

やはり、ビーム兵器の魅力には逆らえない。

それに、多分この世界なら魔力でビームを再現するだろうと見込んでの判断でもあるから、今後を決める大博打でもあったけど。

「俺を鑑定」

<RX-78-2 ガンダム> Lv1

名前なし

HP ــ 38900

MP ∞

平均攻撃力 10460 平均防御力 11000

平均機動力 10400 平均魔法力 10

平均抵抗 10000

スキル

【核融合炉】、【鑑定Lv4】、【n%I∥W】、【リーダーLv5】、【熱源センサーLv3】、
 【ナノスキン装甲Lv2】、【武器錬成Lv6】、【機械生命体Lv2】、【望遠Lv5】、【大
 物狩りLv1】、【毒耐性Lv10】

称号

【意思と理性を持ったゴーレム】

【大物狩り】 【白い悪魔】

スキルポイント：2200

わー、スゴイ。

スキルポイントもかなり溜まっているので、早速魔法とかの取得に使ってみよう！

なんでだあああー！！

思わず頭を抱えて、地面に頭をぶつける。

だつてさ、俺には魔法を行使する力がないとか！

じゃあ、弾や武器の生産はどうなんだというと、色々調べてみた結果、攻撃魔法はま
ず使えない。

そして、治癒系もダメ。

できるのは身体強化系か、武器錬成のような生産系。

つまり、俺は魔法なんか使わずSFの武器使つて戦えと。

…ヒツドイ…

まあ、ピュアファイターも良いかもね。

さて、取得したスキルを見てみよう。

【高速演算Lv1】、【傲慢の支配者】、【忍耐の支配者】、【断罪】、【深淵魔法】、【雷属性耐

性Lv1）、〔水属性耐性Lv1〕、〔PS装甲Lv1〕、〔探知Lv1〕、〔物理攻撃ダメージ軽減Lv1〕、〔ツインエイハブリアクターLv1〕、〔核動力Lv1〕、〔魔王Lv1〕、〔念話〕、〔言語理解Lv1〕

こんな感じになった。

なんか魔王気になって手にいれて、後はモビルスーツは機械だから電気や水には弱いので〔雷属性耐性〕と〔水属性耐性〕。

後はこれはゴレムというか、モビルスーツだからこそなのか、ガンダム作品に登場するモビルスーツのジェネレーターもあった。

装甲なんかもかなりあったので、全部取得できれば最強になれるのではないかと？

ま、めんどいからしないけど。

そもそも、そこまで行けるかが問題だ。

〔鑑定〕がカンストしたので、嬉しいっちゃ嬉しいけどなんかないのかな？と思つた。改めて自分を鑑定して、称号なんてあったので確認するとヤバイ。

〔白い悪魔〕

全ての敵対者に、恐怖を抱かせて恐慌状態にできる。抵抗可能。全能力値が少しだけ上がる。

【意思と理性を持ったゴーレム】

本来のゴーレムにはない、意思と理性を持ったゴーレム。特に効果はない。

【大物狩り】

その時の自分の能力より遥かに高い相手を倒したときに与えられる称号。

自分より強い相手と戦闘になると、全ステータスが上昇する。スキル【大物狩り】を取得する。

ちなみに、深淵魔法とかは入手できなかったは良いのだが、使えないようだ。

まあ、レベル表記されてなかったし、ホントに使えないようだ。無念。

「さて、一番気になるスキルを鑑定しますかね…」

【核融合炉】

ガンダム世界の中で宇宙世紀の核融合炉。MPとSPを無限にするかわりに、攻撃系魔法が行使できない。死亡すると、核爆発する。

【核分裂路】

ガンダム世界の中でコズミックイラの核動力。MPとSPが無限になるかわりに、攻撃系魔法が行使できない。死亡すると、核爆発する。平均攻撃力に補正をかける。レベルが上がると平均攻撃力に補正がかかる。

【ツインエイハブリアクター】

ガンダム世界の中でポストディザスターにおいてのモビルスーツのジェネレーター。平均攻撃力と平均防御力、平均機動力に大きな補正をかける。レベルを上げること、さらに補正が上がる。

【PS装甲】

ガンダム世界の中でコズミックイラにおける、物理攻撃を完全に無効化する装甲。MPを消費し続けることで、物理攻撃を無効化する。非展開時は平均防御力がかなり下がる。

色々チートですな。

でも、まずはここから出れなければ意味がない。

そう考えて、とりあえず上に向かう。

すると、（鑑定でわかった）地龍アラバが登場。

え？戦わないのかって？

いや、さすがに龍は無理だ！

というわけで一目散に逃げたら、一匹の蜘蛛に出会った。

なんていうか、なんとも可愛らしくそして強そうな感じの蜘蛛だった。

「なnでガンダム+Cところにいるo oおー!？」

「え？」

え、今この子、ガンダムって言ったよね？

「あれ？私のk O氷ば解るの？しかも日本語!？」

<スキル【言語理解】のレベルが上がりました>

「いや、若干不鮮明だがなんとか解る」

「やった…同じ転生者だあー!!」

蜘蛛に抱き着かれた。

いや、俺もモンスターではあるけどさすがに人の子供くらいの蜘蛛に抱き着かれて嬉

しいとかは思えないよ……

「あの一名前は？」

「えーと、確か若va姫色」

「若葉姫色（わかばひいろ）? …… ヴえ!？」

<スキル【言語理解】のレベルが上がりました>

「まあ、私はあまり目立たない人間だったしね…」

「……俺、操騎王牙（あやきおうが）」

「え? つまり…私（俺）の…」

「許嫁!？」

こうして、同じ転生者である蜘蛛子さんが新しい仲間になった。
なんかすごいことになったが。

episode 3 ガンダムと蜘蛛のご一行

さて、まさかの未来の嫁と人でなくなつて再会するとは思わなかったが、情報交換…というか双方の情報はとも助かるものだった。

「いやー、まさかモビルスーツになつてゐるなんてビックリだわー」

「俺も許嫁が蜘蛛になつてゐるなんて、驚きでしかないよ」

スキルポイントはある程度あつたので、念のために「念話」を取得しておいたのだが、マジで良かった。

【言語理解】があつたのも良かったのだが、蜘蛛になつた彼女はよく食う。

そのため、離れた場所でも会話を取れるようにしてあるのだが……

ま、普通ならいららないと思うだろう。

彼女もそんな感じの一人(?)だった。

「でも、ガンダムでも全く食事みたいなのをとらないなんてないと思うけどな〜?」

「確かに。強いて言うなら水か?もしくは魔力?それとも両方か?ま、とりあえず念のためにもう一度確認するか」

【核融合炉】

メリット? M P ・ S P が尽きない。

デメリット? 定期的に水と魔力の補給が必要

「どっちもだったわ!!」

「マジかい」

つて、おい猿を食ってんじやねえか。

大丈夫か? それ?

「んまあ、悪くはないんだけどね…最後の鳴き声がうるさかったなあ」

「確かにな……ん? 待てよ……」

「どーしたんだーい?」

ちよつと待て、最後にうるさすぎる程の鳴き声?

何かこれに起因するような物があつたような………主にゲームとか。

「つ! 蜘蛛子! 急いでトラップをありつたけ作れ!」

「え? どゆこと?」

「さっきの鳴き声は、仲間を呼ぶためのやつだ!」

「ええつ!?! あのゲームでよくあるやつう!?!」

「簡単に言えば、モン○ンのク○ペッコみたいなやつだ!」

「あー、確かにいたねーそんなやつ」

おい、何のんきでいんだよ。

「え？だつてガンダムいるなら一騎当千でしょ？全部倒せんじやないの？」

「おい、何で俺の思考を読んでんだよ。そもそもガンダムでも千体以上も真正面で相手できるか！」

「え？マジで？」

「ガチだ」

「急いでトラップ作りますうー!!」

レーダーには確かに千体以上もいる。

これつてマジでガチでまずい。

ガンダムである俺は、装甲の問題でどうなるかは分からないが、少なくとも蜘蛛子がまともに攻撃を食らえば、一撃で死ぬだろう。

さすがに親同士で決めた許嫁が目の前で死ぬなんてやだなので、色々と対策を講じている。

急いで堀を掘つたり、刺ありトラップやつたり。

武器錬成楽だわ。何もないとこから作り出せるのだから、マジで質量保存とかの法則どこいったのやら。

……そのぶん本来の消費する魔力量なんて知りたくもない。

さあ、
血肉踊る軍団戦をしようじゃないか……！！

episode 4 猿狩りじやあー!!

やあ、今日も元気かい？

俺達は今日は許嫁と一緒に猿狩りしてんだ！

助けるコノヤロー！

「ハイパーバズーカアー！」

圧倒的な数に、なりふり構ってられない俺達は、蜘蛛の糸をぶん投げ、ビームを撃ちまくり、爆発の嵐が猿たちを襲う。

が、怯むことはなく、ただ復讐のために突撃してくる。

「蜘蛛子おおー！毒もバンバン使ってるかあっ!？」

「やってるよ！でも数が多すぎ！後、蜘蛛子やめい！」

「コードネームや！」

「ああなるほどですなあってなるかいっ！」

と、コントをやったら猿の上位種だろうか。

ソイツがその体躯には似合わない力で自分の体より大きな岩を蜘蛛子のマイハウスを直撃させた。

「ウオオオオオオー……ッ!?」

「ヤバイッ!?」

不味い、足場がないと猿たちに蹂躪されるっ!

「蜘蛛子!糸を頼む!」

「オーライ!」パシユ

蜘蛛子が発射した蜘蛛糸は、俺のランドセルの部分にくつつき、一時的な命綱になる。

「蜘蛛子!足場を頼むぞ!」

「よーし!うりゃあ!」

俺は時間を稼ぎ、蜘蛛子は俺が立てる足場を作る。

なんだろう、ゲーム感が否めない。

「うわわ!?またかよ!」

スラスターを噴射して、また投げられた大岩を回避する。

しかし、マジでスラスターの熱がこもっていて、そろそろオーバーヒートしそうで不味い。

「っ!!スーパーナパーム弾!」

広範囲を焼き払う武器を錬成する。

作っては放り投げ、作っては放り投げ、爆発すると共に何十もの猿たちを焼き付くす。

<レベルが上がりました>

「確かLv59ぐらいだったか？そうだとすると、今はLv60か」
進化先も沢山選べるようになっていて、マジで選別が憂鬱になる。

まあ、スーパーナパーム弾を使ったら大量に入るよな、経験値。

「こっちはもうLv60だぜ。蜘蛛子は？」

「私はLv40。後、足場できたよー！」

「ありがとうよ！」

スラスターを吹かして、足場まで飛ぶ。

「ウオツ!?近くにいただけで暑いんですけど!?!」

「マジで?…:…つーか、今はそんな暇はないぞ！」

「わかってるって!えーい！」

毒を生成して、蜘蛛糸で猿を動けなくして…と様々な働きをする蜘蛛子。

俺だつて負けてはいられない。

蜘蛛子がテクニクタイプなら、俺はパワー・スピードタイプだ。

「射撃のゴリ押しでい！」

ハイパーバズーカをとにかく撃ち、弾が切れれば即座に捨てて新しいハイパーバズーカを錬成する。

もちろん、二丁持ちで。

しかし、まだ敵は尽きそうにない。
どんだけいるんだよ…。

長い攻防は、俺達の勝利によって終わりを迎えた。

猿たちがほとんど全滅し、後は上位種だけのところをビームサーベルやガンダムハンマーで殺した。

二体俺がやって、残りは蜘蛛子が倒した。

「ナイスファイトだったぜ、蜘蛛子」

「もう、蜘蛛子呼ぶな……まあ、ないよりマシだから良いけどー！」

と言って、俺達はグータッチをした。

まあ、蜘蛛の前足と金属の拳をぶつけたただけだが。

さて、猿たちを殺しまくったのでとにかくLvが上がりまくった。

進化先はどこへ行くのかな？

進化先は以下の通り

- ・ブルーデステイニリー号機
- ・陸戦型ガンダム
- ・ガンダム3号機
- ・ガンダム4号機
- ・プロトタイプガンダム
- ・ガンダム5号機
- ・ガンダム6号機(マドロック)
- ・ガンダム7号機
- ・ガンキャノン
- ・ガンダム(Gパーツ)
- ・ガンダムMk-II
- ・ジム・クウエル
- ・ゼファイランサス
- ・サイサリス
- ・ジム・カスタム
- ・ジム
- ・ガンダム・ヘッド
- ・フルアーマーガンダム
- ・フルアーマーガンダム(TB)
- ・ヘビーガンダム
- ・ジーライン・ライトアーマー
- ・ネットイクス
- ・ガンダムNT-1
- ・ウイングガンダム
- ・ガンダム・バルバトス
- ・コアガンダム
- ・ガンダム
- ・エクシア
- ・シャイニングガンダム
- ・ガンダムX
- ・アストレイレッドフレーム
- ・デュエルガンダム
- ・カットシー

「どれを選ぶか……」

蜘蛛子に守るのを頼んで、進化をする。
そして、俺はさらなるモビルスーツに進化した……

episode 5 モビルスーツを溶岩に突っ込まない てください！

俺はガンダムより、より強固な装甲を、より高いパワーを持って進化した。

「おおー！これ確か……」

「ガンダム・バルバトスだ！」

＜進化が完了しました。条件を満たしました。一年戦争シリーズが使用可能になりました＞

「え？マジで？ホントですかダチバナザン!？」

「なんでここで仮面ライダーネタやるんだーい!?!?」
「蜘蛛子、落ち着いて聞けよ？」

「う、うん……!」

「…一年戦争のモビルスーツが全部使えるようになった」

「なんですとおー!?!」

「これ、まさかコンプできるやつ？」

「まあ、このエルロー迷宮での過酷な状況を考えるとこれは良いことだろ？」

「あー、確かに」

「それに、スキルも自動的に増えたし、新しく取ったしな。結構えげつないかも」

NEWSスキル

【ナノラミネート装甲】

物理攻撃、魔法攻撃によるダメージを大幅に軽減する。【エイハブ・リアクター】もしくは【ツインエイハブ・リアクター】の取得が条件になる。

【阿頼耶識システム】

自分より強大なものを相手にするとき、全ステータスが飛躍的に上昇する。

発動中は、半バーサーカー状態になる。

【鉄華団Lv1】

鉄華団所属のモビルワーカー、モビルスーツの支援を受けれる召喚魔法。レベルが高いほど、存在できる時間が長くなる。

【チェンジ・モビルスーツ】

特定条件を満たしたシリーズに、乗り換えができる。ただし、進化先はデフォルト状態と変わらない。

【バイオ・コンピューターLv1】

高速演算と高速学習能力で、相手の動きに対応できるコンピュータ。【並列思考】と【高速学習】を統合している。モビルスーツ専用。

【バイオ・センサー】

反応速度を高めるスキル。感じたままに動ける。そして、特定条件でビーム系の兵装のリミッターを外して、威力を爆発的に上げる。

【ミノフスキー・フライト】

ミノフスキー粒子によってどんな形状でも飛行を可能にする。場所問わず、このスキルは有効。

「どひゃあ。かなりありますなあ!」

「空を飛べるようになったから、いつでも俺の背中にしがみつけるぜ?」

「やってみよー!」

ということで、背中に蜘蛛子に乗せて飛んでみた。

もちろん、スラスターの熱で焼かれないようにしがみつく場所はちゃんと選んでいるが。

「わーい！空を飛んでるぞー！」

「あんまはしゃぐなよ。バランス崩したら真っ逆さまだから」

しばらくテスト飛行して、また地上に降りた。

蜘蛛子は満足したようだ。

「んじゃ、あの先へ向かいますか」

と、俺が指差したのは溶岩溢れる溶岩地帯。

結構前から、蜘蛛子は熱耐性系のスキルの取得に勤しんでいた。

でなきゃ、ここから先には行けないしね。

あのハイラルの勇者みたいに食べて回復しながら先へ進むなんてできんし。

ちなみにバルバトスを選んだ理由でもある。

宇宙世紀やガンダム世界のビームは、ミノフスキー粒子やら何やらで構成された光の

速さで飛んでいく超高熱の塊である。

この世界では、熱耐性のスキルがどれ程の物か解らないので実弾や実体剣主体の鉄血

モビルスーツにしたのである。

ナノラミネート装甲とフレーム自体が、溶岩の熱に耐えられるかは別問題だが既に試

したので問題なし。

さすがに溶岩の中に突っ込んだら二秒で溶けるだろう。

実質、ガンダムの上に折れたブレードアンテナを放り込んでみたらそれぐらいで溶けたので。

「それじゃあ、レッツゴー！」

「アイアイサー！」

陽気な蜘蛛子さん一行が、溶岩地帯へと進む……

episode 6 火龍と蜘蛛子の進化

溶岩地帯に来たが、やっぱ蜘蛛子の弱体化は免れなかった。

何故なら蜘蛛糸が溶岩の熱で自然発火するからだ。

「あちちっ!？」

「蜘蛛子…信じたくないのは解らなくないけど、諦めろよ?」

「ぬう…」

蜘蛛子は蜘蛛とはいえ生き物なので、腹が空けば食べなきゃ死んでしまう。

俺の場合は定期的に水と魔力を流し込めば、半永久的に動ける。

だからこそ、蜘蛛糸というアドバンテージを失いたくないのが蜘蛛子の心情である。

「蜘蛛子は良いよな…味を感じれるんだから」

「そう言われたら、そっちは食べなくて良いなんてずるいよ…」ムシャムシャ

「でも、燃料が切れたら後は運に任せるのみだぜ?」

「うっ…それは確かに私の方がマシかも」ゴクンツ

蜘蛛子はナマズもどきを美味しそうに食っていた。

機械の体であるため、食欲を感じないのだがそれでも元人間である俺としては美味し

そうに食べているのを見ているのは応えるものがある。

いわゆる、機械のあるあるである。

「おっと、またナマズが来たぞ」

「ほうほう」

リーダーに引つ掛かったのはナマズ。

それと……近くにタツノオトシゴもどきか？

「タツノオトシゴもいるかもしれないな。とりあえず、二手に別れて倒すか」

「了解でありませーす！」

………なんか俺がリーダーみたいになってないか？色々不味い気がする。

ともかくとして、問題なくナマズとタツノオトシゴを仕留めたので蜘蛛子の食費になつていく。

しかし、定期的にと言われているが後どれくらい俺が稼働できるのか解らないんだよなあ。

「残り稼働時間 残り1日」

「んん？」

なんか目の前に表示されている。

残り1日？ヤバくね？

食べてる最中の蜘蛛子に、俺は呼び掛ける。

「蜘蛛子、唐突だが魔力を込めた毒水を俺の供給口に突っ込んでくれ」

「え？……ええ!？」

とまどう蜘蛛子。

まあ、そりやそうなるよね。

「後一日しか稼働できないから、早く」

「お、OK！今すぐ！」

と言って、すぐさま毒水を作り出す蜘蛛子。

水とは表記されていたが、別に純粋な水でもなくても動けるのだろう。

だからこそ、非常手段として蜘蛛子が生成する毒水を使う案も出ていたが、まさかこんな早く使うとはおもわかんない。

正直、毒水はあまり気が進まないが。

だってなんでわざわざ毒を貰いにいかなきゃあかんねん。

毒状態になりそうで怖いわ。

毒水が入って来た。

水、魔力共にバーは上にと上昇している。

満タンになる頃には、蜘蛛子のMPは半分を切っていた。

「わりとそこまで消費しないんだな」

「こつちとしては一番の戦力を半分失って大変ですけどねー！」

「それに関しては申し訳ない」

さて、補給が終了したところで進むかと思ったら今度は蛇みたいのが。

まあ、問題なく倒して蜘蛛子の食料になる。

が、そこで蜘蛛子が進化できるようになったようなので、俺はとりあえず進化し終わるまで省エネモードで待機した。

この状態はある意味、睡眠状態なので唯一俺が人みたいな事ができる機能だ。

それでも眠気とかの三大欲求は無いのだが。

いくらか時がたった。

「まだかよ……」

俺の時とは違って、一週間近くこのままの状態だ。

俺の時は長くても一日らしいが、蜘蛛子の場合は生物なためか時間がとにかくかかる。

その間にモンスターが近くによることはあっても、特に何かする事もなかった。どういふことかは俺には理解できないのですぐに思考放棄して惰眠をむさぼった。そして、遂に蜘蛛子がようやく進化し終えた。

「長かったなあ……」

「個体名はゾア・エレ！めっちゃ強くなったぞ！」

「でも、俺と戦ったら完全に俺が有利じゃね？」

「………確かに。でも私が王牙と敵対することなんてありえないでしょ」

「まあ、そうだよな。でも、俺みたいな敵を想定するのも悪くはないだろう？」

「一理納得ですなあ」

と、久しぶりの会話をしたがるリーダーに新たなモンスターの反応が。

「蜘蛛子、何か来る」

「え？マジで？」

ソイツは姿を現した。

鑑定すると、個体名は火龍レンド。

だが、見れば解るように、かなりの大ダメージを負っているようだ。

骨まで見えてるし。

「なあ蜘蛛子、生き物ってあんなんでも生きていけたっけ？」

「いやいやーありえないでしょ」

episode 7 火龍レンドVS蜘蛛子&バルバトス

ヤバくないか？

普通は骨が見えりや瀕死なのに、HPはあんまり減らないし全然余裕がある様子。

「やるしか…ねえよな…？」

「それしかないでしょ…こつちを完全にロックしてるんだよ!？」

レンドはブレスを放ってきた。

俺はスラストを噴かして回避し、蜘蛛子は跳躍して避けた。

「腕をアンカーに変えるか」

「えーい！やつたるうー！」

俺は滑空砲で蜘蛛子の援護。

蜘蛛子が直接的に毒や糸を使ったテクニシヤンな戦いを繰り広げる。

「ちっ！」

「ガアアアアー!!」

ブレスをとにかく撃ってきて、援護しづらい。

だが、そのぶん蜘蛛子に余裕ができる！

「くらえ！私特製の毒を！」

……いや、別に特製ではないでしょ。

「ガウツ!?……グガアツ!!」

「わわわっ!!」

体力はまだまだあり、かなり厳しいぞこれ。

「蜘蛛子！ローテからのスイッチだ！」

「了解であります！」

MPに物を言わせたレンドの炎の弾幕を回避しながら、俺と蜘蛛子は役割を交替する。

「物理のダメージの入りが低かろうが！当たりや怯むッ！」 ガゴンッ！

「グオオツ!!」

「スイッチ！」

「くらええー!!特大毒水ウー！」

俺はバトルメイスをレンドの横つ面にぶつけ、空いている口に蜘蛛子がすかさず特大かつ強力な毒水をぶっこむ。

だが、少しずつしか削れていない！

「蜘蛛子！俺が前衛やるから、特大の魔法を頼むぞ!!」

「ラジャー！完成するまで死なないですよ！」

蜘蛛子は深淵魔法が使えるようなので、その今現在使える最大級の魔法をさせる。

しかし、彼女の思考系統の複数のスキルでも時間がかかるため、時間稼ぎが必要だ。

バトルメイスでレンドの脆そうな腕と打ち合う。

脆そうな見た目ののに、碎けず折れもしないレンドの腕は伊達に龍を名乗っていないことを教えてくれる。

「バトルメイスじゃ厳しいなッ！」

バトルメイスをレンドに投げつけ、刀を武器錬成する。

「数で勝負だッ!!」

「ガウッ！」

何度も何度も刀とレンドの爪がぶつかる。

切れ味が落ちれば新しい刀を錬成し、更に対峙する。

「蜘蛛子オオー!!まだかああー!!?!」

「いけるよおー!!」

よしー！

【地獄門】 ツ!!」

正直、くらいたくない魔法です。

見ていて本気で思った。

しかし、これを受けてもまだ瀕死ながら生きているレンドには本気で驚きしかない。

「トドメは頼むよ！」

「リョーカイ！」

俺はバトルメイスを錬成して、頭上から降り下ろした。

「グギャアアアー!!」

まだ死なない。

今度はレンチメイス！

「落ちろおおー!!」 ギュイイイイイイン！

「ガツ…アアアツ!!」 ボドン

レンチメイスを首に挟んで、内蔵されたチェーンソーで切り裂く。

こうして、火龍レンドを倒した。

<レベルが上がりました。Lv3からLv30になりました>

<バルバトス・ルプスレクスに進化が可能です>

「蜘蛛子お……生きてるよなあ？」

「生きてますう……」

何とか勝てたが、精神的に疲れた俺達は溶岩地帯から抜け出し、近場の洞窟に簡易的なマイホーム（蜘蛛子専用）が作られた。

「しばらくはここで休息だな。特に蜘蛛子、SPがヤバイだろ」

「うん。これはかなり不味いよ。すぐに何か食べなきゃ……」

レンドを倒せたのは良いが、溶岩地帯に入ってたったの一週間近く。

しかも、蜘蛛子の場合には進化直後にレンドがやって来てしまった。

SPに余裕があるはずがなく、俺が蜘蛛子のための食料を取りに行かなければならぬのだが……

「くっそ。リアクターに負荷がかかりすぎて、オーバーヒートしてらあ」
「マジ…か…」

溶岩の熱にもやられている上に、何度もスラスターを噴かしたのだ。
オーバーヒートなんて、予測できるもんだ。

「蜘蛛子、自力で何とかやれるか？」

「かなりっ…ギリギリっ！……」

しようがない、非常手段だ。

「蜘蛛子、今から進化する！それで何とかしてみせる！」

「……う……」

ダメだ。蜘蛛子の意識が落ちている。

疲労もあるせいで、空腹によるダメーჯがジリジリと蜘蛛子のHPを削る。

「頼む！早く進化してくれよ！」

俺は一世一代の大博打をした。

episode 8 解き放たれる悪魔の狼（良い意味で）

次に目を覚ましたときには、既に蜘蛛子は起きており、今だにジリジリとHPが削られていた。

「急げ！俺！」

新しい体を動かす。

装備、武装が一新されたガンダム・バルバトスルプスは、仲間であり許嫁の蜘蛛子を助けるべく、スラスターに火を噴かせる……！

結果。

「んひよおおー！うんまい！」

何とか間に合わせてカエルやその他諸々。

余程の飢餓感からか、不味いと言っていたものでも美味しく感じるようだ。

「うまいかー？」

「うん、不味いけど美味しい！」

いや、蜘蛛の顔でサムズアップされても困る。

前世での彼女なら可愛らしく目に映るのだろうか。

「んじゃ、しばらく休暇するか」

「おー！………て、休暇？」

あれからしばらくあの場所にいたのだが、俺達の存在を知ったのか人間たちがやって来た。

「こちらとしてら交戦の意思はないのだが………まあ、なるようになれだ。

「なあ、蜘蛛子〜」

「んー、なにー?」

「人間が火で蜘蛛の巣焼いてるけど、大丈夫なんか?」

「んー、大丈夫じゃないなあ………ってえええー!?!」Σ(㇏。 ; /)

実際に焼かれて人間が近づいてきている。

俺なら言語理解で相手の言葉を時間が少ししかかるが、解るようになる。

蜘蛛子にはなかったみたいなので、ロボットならではのスキルだろう。

「↑↑↓?∇∞∪†→b≪≪%≡:d」

「○×☒)(# [: . ○) ⊙ ⊕ < ≡ 8」

うーん、ホント何言ってるのか解らん。

とりあえず、俺が先に出たほうが良いだろう。

「な、なん?、》》《《「あー々☒△◆!?!」

「ま、まさか I E Σ O Δ エ わ ∫ ∈ C √!?!」

「あー、その敵意は無いんだが……ってまだ無理か」

老人が一人、多分魔法使いの類いに隣に若い男性。見た目からして貴族か何かで、フルメイルの兵士が十人以上。

とはいえ、彼らの剣やステータスでは俺の装甲に傷をつけるなど、夢のまた夢だろう。

「あれ ∈ Σ? ● °C ♂ と言つて T ⊗ L y x d Ⅲはずだ!」

「ロナント Γ エ 彖 E P カ Δ!?!」

あの老人はロナントというようだ。

とりあえず、ロナント、と声を出して何回も繰り返す。

それにビビる人間たちだが、当のロナントは目を輝かせる。

「まさか《能力を持つているのか!?!」

「ロナント様! 危険です! B α H K Z o い!」

ちなみに、俺はさつきから手をあげて降伏の意を示しているのだが、ちゃんと伝わっているのだろうか?

「まさか、こんな場所で古代兵器たる、魔導人形を発見できるとは!」

「……………あー、その魔導人形って何だ?」

「おおつ!?! 知能まで持っているのか!?!」

「あー、すまんが落ち着いてくれ。とりあえず敵意はない。それと、同居人が悲しみであるたらを殺しそうだから一旦糸に火をつけるのもやめて」
さて、とりあえず情報を頂こうじゃないか。

episode 9 蜘蛛とモビルスーツは夫婦（予定）

言語がちゃんと解ってきたので、とりあえず、何のためにやって来たのか聞くことにしたのだが……

まあ武器はおろしてくれないよね。

「おお……まさか魔導人形が存在して高度な知能を持っているとは……！」

「魔導人形？何だそれ？」

「ロナント様！書物にある魔導人形とは全く違いますよ!？」

「最近の資料の解読で魔導人形には、高度な知能があったというのが発見されている。ともかく、話させてくれ！」

「ちよっ!？」

ロナントさん、めっちゃ……すごい人だと思う。

蜘蛛子は警戒してるけど。

《蜘蛛子、ここは俺に任せてくれ。だから、殺気を飛ばすの止めい!》

「え!?!私そこまで殺気飛ばしてないよ!?!」

《……じゃあ、最早体質だな》

「そんな体質ありいい!？」

と、ロナントさんの話を聞きながらそんなコントもしていたが、彼らがそんなことを知ることはないだろう。

―数十分後―

「魔王に勇者、ね…」

ありふれみたいな勇者（笑）でないことは、彼らの評判から明らかだが、ソイツらが数カ月くらい前にこの近くに来てたらしいと言うことには、蜘蛛子に思念を伝えながらもちよつとない冷や汗をかいた。

蜘蛛子も同じく、ちよつとでも早くここらにいたらその勇者とやらに呆気なく倒され

るのを想像して恐怖している。

「まさか、記憶を失っているとは……中々研究は進まんの」

「しかし、これを持ち帰れば世界中が驚きますよ！まだ稼働できる魔導人形があるなんて……」

「しかし、魔導人形が進化するなぞ聞いたことがない。もしかしたら、はるか昔の古代文明はそれさえも可能にしていたのだろうか……？」

あちらはあちらで楽しそうに会話をしている。

というか、本題からめっちゃ離れてるし。

「あー、それで本題に入りたいんだけど……」

「フム、そうだったな」

忘れていやがった……！

まあ、俺も似たような事はあったので何も言わないが。

「まずは、何故そこにいる……見たこともない魔物といるのじゃ？」

「まあ……意思疎通ができる上、色々あって一緒にいる関係ですね」

「ホウ……」

「こちらとしては、攻撃しないのならこちらからも関わらないし、攻撃するつもりもないです。いずれ、ここから出ますが彼女も俺も人間には特に敵意はないので……」

「……つまりは、人間に害意を与えるつもりはないと?」

「はい、そういうことです」

蜘蛛子にも、思念で伝えて俺と一緒に首肯する。

まあ、それだけの動作で周りの人間が怯える。

俺の場合、軽めの殺気で感じるのだが彼女自身は抑えが聞かない模様。

しようがないから、事情を説明して納得はしてもらった。

が、本能的に逃げたくなるのだろう。

ビビるにビビる。

「…人間を襲わんのなら、わざわざ倒す必要はなからう。帰るぞ」

「…ちよ…はあ、解りました」

「ありがとうございます」

と言っておいて、俺は出口辺りまで送る。

出口と言っても蜘蛛子のマイホームのだけど。

結局のところ、蜘蛛子が原因とも言うがぶつちやけ生きているとはとても言い難い俺にとつてはすつごくどうでもいい。

それと、蜘蛛子が言つてた地龍アラバ……蜘蛛子はソイツと戦い、トラウマ克服したいみたいな事を言つていた。

仲間として俺はそれを手伝おうとは思うが、問題なのはこちらの攻撃がちやんと通じるかという問題になる。

まあ、どつちみつちにしろ殺るだけだが。

「蜘蛛子ー、戻つてきた……つてヴウエエ!？」

何か黒い西洋風の鎧を纏った男が、蜘蛛子の目の前に立っていた。

そして、地面に光るそれは……

「スマホオオー!!?」

「おK ㄩゑ:P L :?」

しかもまた別の言語だし!

あ、でも最初は少し聞けたから多分何か邪魔でも入ったせいかな。

蜘蛛子もこの状況を把握できてない限り、完全に意味がわからん状態なのだろう。

だが、この男。プレッシャーが凄すぎる。

さっきの人達がいたら、あの人たち全員死ぬか逃げ出すだけだな。

しかし、何となく本能か何かが次のレベルになれば勝てるかも……みたいな勘を告げ

ているのだが宛にできんわ!

「EBZKP (Z | o : 」

あ、なんか転移してどっか言った。

そして、残されたのはスマホ。

そのスマホから日本語が聞こえた。

「やあ、元気にしてるかな?」

「…何でスマホ?」

「俺もだ」

「馴染みがあるものの方が良いでしょ？」

いや、むしろ異世界でスマホってシニールというか、違和感しかない。

スマホで知識チートしてた某少年たちならともかくとして。

「まあ、とりあえず私の話を聞いてくれるかな？」

ということとで彼女の話の話を聞くと、とある勇者と魔王が彼女に攻撃してその余波で俺達が死亡。

責任を取るために異世界に転生したという。

ちなみに、邪神で名前はとりあえず管理者Dと名乗った。

「じゃあ、何で私たちは人外なの!？」

「そっちの方が適正があったから」

「俺は？何でモビルスーツ？」

「……………貴方に、モビルスーツになりたいっていう願望があったから叶えてみたんだけど？」

「いやあ、少し思っただけだぜ?…まさか、あの古文の授業で思ってた願望が願ってしまっただけ!？」

「うわあ……………ちよつとそれはないわあ」

「待て！蜘蛛子！冗談半分で思ってたただけだぜ！」

と、誤解されてしまったので誤解を解こうとする。

その様子を見て、何故か嫉妬してるような声でこう言う。

「夫婦ですわねー」

「……………まあ、許嫁だから」

「…何かムカつく！」

初めて管理者Dが感情を思いっきり込めた声を出す。

何がどうなってるんだよ……

何だかんだで、俺達はこのあとの予定を考える。

一応【思念】で蜘蛛子とは連絡できるので、迷宮で離れ離れになっても一応大丈夫ではある。

「俺としては蜘蛛子が心配だぜ？まだ体調はばっちりじゃないんだから」

「でも、アラバを倒すには早くレベルを上げないと……じゃないと私、逃げちゃう」

「なら、逃げないようにバッチリ俺が掴んでやるよ」

「それはそれで怖い」

「……………ハハハハハ！w」

一方、管理者Dのとある部屋

「……ぬぐぐぐ……やっぱり蘇生しちやえば良かったかな……」
テレビ画面を見ながら何故か嫉妬するDであった。

おまけ 主人公二人に聞いてみた！

問 二人はどんな関係？

バル「うーん、ゲーム仲間？オタク仲間？まあ、一言では言い表せないけどぶつちやけると兄妹みたいな？」

蜘蛛子「んー、ゲーム仲間でもあるし、オタク仲間でもある。まあ、凄く親しい関係であることは認めるよ」

問 許嫁と紹介されたとき、どう思った？

バル「初めて出会ったのは小6の時。その時は、可愛いなあぐらいだったけど、今だと地味であることは認めるね。でも、彼女が隠れ美人であることは俺が証明しよう」

蜘蛛子「うーん、解んない。その時は恋心とか恋愛に興味がなかったしね。でも、可愛いつて言われて嬉しかったなあ……」

問 相手の事は好き？

バル「……………黙秘はダメ？／／／」

蜘蛛子「……………うん／／／今だと色々あつて、アプローチできてないけど、結構アプローチしたんだよね。鈍感だから気付いてくれないけど……」

問 転生して人間だったら二人はどうした？

バル「友達探してたかな？まあ、数人だけ。でもまあ……………（沈黙）」

蜘蛛子「……………さっきの話でこれ？…まあ、彼と出来たらけ、け、結婚できたらなあ……後は、魔法少女したかった……………」

またやるかはわ・か・ら・ん！

episode 10 VS地龍アラバ

あれから数週間。

とにかくレベル上げ。

たまに人が俺と戦いを挑み、倒されるが俺は殺していない。

何故なら普通に人を殺すのはやらないと、ロナントさんに言ってるし、蜘蛛子に関しては生死に関わるのでOKなのだが、俺としては綺麗事ではあるが人を殺したくない。

無闇に殺すのもあれだし、普通に戦いというものに楽しさ……というより、趣味な感じがある。

どこぞの焼け野原君みたいな戦闘狂にはなりたくないが、娯楽が少ないこの異世界ではある意味唯一の趣味とも言える。

峰打ちや頭を軽く叩いて気絶させたり、動けなくさせる程度。

そして、終わったら彼らを出口まで送っている。

そのため、いつの間にか俺の事を武神とか言うようになって、修練の相手として崇められ、尊敬され、畏怖され、憧れになった。

何だかんだで勝手に神をつけるのはよくない気がするが……俺の場合、ロボットだ

からか戦闘を経験するだけでも経験値が入るし、継続的に様々な人間たちと戦うので対応力や判断力、集中力などが向上した。

そのおかげで「ガンダム・バルバトスルプスレクス」に無事進化しました！

会話もできるため、初心者以案内をしたりとか人間の冒険者たちの生存率を上げていた。

いかにもヤバイやつとか、悪人には鉄拳制裁……というか、修正を試しているのだが大抵は改心して態度や性格が改善され、そして俺を神のように奉る。

できないやつは、蜘蛛子に食べてもらってる。

彼女も美味しい経験値が入って嬉しそうだし、俺としても汚物を綺麗にできてスツキリである。

「で、地龍アラバと戦うと」

「おう！って、何気に進化してるし!？」

「ガンダム・バルバトスルプスレクスだ！」

「長い！そしてカッコいい！」

「ちなみに、ルプスレクスはラテン語で狼の王だぜ」

「いよ！狼の王！」ノリノリ

と、久しぶりの夫婦コントみたいなのをやって、笑い合う。

やっぱり、彼女は魅力的である。

蜘蛛子との共同作業により、罠の設置や仕掛けを早くすませて、作戦を練ることができた。

まあ、俺は基本的に遊撃によるゴリ押しだが。

「管制塔！頼むぜ！」

「モビルスーツが蜘蛛に指示をおおるって、何かシユール……………」

ズウウンと、目標が近付いてくるのを確認する。

彼女の力が足りなかった場合、彼女を保護する秘策があるのだが、あれを試したとき蜘蛛子はこう言った。

「興奮するけど乗り物酔いしそう……」

という、何とも言えない評価だった。

まあ、アラバを倒す必要経費なら我慢ということで蜘蛛子には我慢。

「さて、やりますかね……」

死闘を始めようじゃないか。

………生きて心地がしなかったぜ。

だが、生きている。

何故ならナノラミネットチー装甲トのおかげで、ほとんど無傷である。

だが、蜘蛛子がドンドン上に行ってしまったので、俺は途中で追いかけるのは止めた。魔法が使えないし、肝心のスラストも空をある程度飛ぶことはできるのだが、長くは飛べんしその場で待機。

彼女がピンチなら助ける準備をするだけだ。

「………体がおしやかになるかもしれないけどな……」

数分に及ぶ、タイマンの結果蜘蛛子はかなりのダメージをアラバに与えたようだが今まで貯蓄してきたスキルポイントを対策につき込んで、かなり強くなっているのが、鑑定で解った。

まさか、あそこまでやるとは。

だが、こちららもあちらも全力で尽くしている。

これほど素晴らしい戦いはないだろう。

ちなみに、地龍について暇なときに鑑定で調べてみると地龍に連なる種族全体に武士道な性格があるらしい。

こっちの武士道が、意味がわからん武士道みたいなやつでないことを願いたい。

変な想像だが。というか、あり得ないとは思うが。

「ヘルプミイイイー!?!」

「了解!我が許嫁よ!」

秘策!【搭乗】!

蜘蛛子が光り、俺の中に入るのを感じる。

ちなみに、原作のように操縦桿によるコントロールも可能だということの確認済みだ。

まあ、あの時は少し大変だったが……………

「アラバ、今度は俺とタイマンだぜ」

そこからは、激闘だった。

蜘蛛子によって致命傷に近いところまで体力を減らされたにも限らず、体力を自動回復している上に俺への攻撃も激しくなっている。

これは……………あれを使うしかない。

「蜘蛛子、激しい揺れと衝撃にご注意な！」

「ええっ!?!ちよつ、シートベルトオオー!?!」

ギリギリ蜘蛛子はシートベルトを着けたのと同時に、阿頼耶識システムによる機体出力を最大出力にする。

「さあ、俺の命を使っていこうぜえー!?!」

蹂躪に近い戦いだった事は、覚えている。

ティルブレードは、アラバの尻尾を切り飛ばし、アイアンネイルはアラバの左目を
抉った。

そして、途中から蜘蛛子が飛び出して彼女も独自の戦いをする。

地龍アラバは、確実に死に近づいていた。

だが、彼は死ぬまで死力を尽くして戦った。

その表情は何とも言えない、人として表すならまるで弟子の成長を見届けるような顔

でこちらを見ていた。

そして、遂に倒した。

だが、本当の最後の瞬間まで勝者の姿を見届けようとした。

小さな蜘蛛と、大きく損壊しながらも立つ獣の悪魔を。

episode 11 さあ、エルロー大迷宮を脱出だ！

地龍アラバを倒して数日。

その間に地上へと繋がる大迷宮の出口へと向かう。

「ようやく……か」

蜘蛛子は、アラバが死ぬとき、その佇まいに苛立ち絶叫した。

それに俺はこう言った。

「アイツはアイツの全力を尽くした。俺達は俺達の全力を尽くした。どっちにも卑怯もくそもない。胸を張って良いんだぜ、蜘蛛子」

「……………」

ともかくとして、蜘蛛子のトラウマは克服されたと言っている。

で、俺の進化ターイム！

進化先は以下の通り。

・ガンダム・バエル ・ガンダム・グシオン

- ・ガンダム・グシオンフルリベイク
- ・ガンダム・フラウロス
- ・フラッグ
- ・
- ・ガンダム・Zガンダム
- ・シャイニングガンダム
- ・ゴッドガンダム
- ・デュエルガンダム
- ・Vガンダム
- ・FAZZ
- ・リ・ガズイ
- ・ガンダムエクシア
- ・ガンダムデユナメス
- ・ガンダム・マルコシアス
- ・シルヴァ・バレット
- ・クロスボーンガンダムX1
- ・ガンダムX

俺が次に選んだのはゴツドガンダムだ。

超^{怪奇現象}常現象やオーバ^{チート}ート^{テク}ク^ノロジ^{ジー}ーを満載のあの世界の力なら、普通に素手でも渡り合えるだろう。

「ゴツトフィンガーが楽しみですなあ」

「んなこと言われても俺はあまり使わないと思うんだが」

「にしても、アラクネに進化するためにはまたレベルを上げてかないといけないんだよな？」

「うん、でなきや魔物だから君といたない時はプスって刺されそうだよ」

「どこのヤンデレだよ………まあ、確かにそうでもあるが、言語はどうすんだ？口で意志疎通できるようになって、言葉が違うんじやどうしようもないぜ？俺がいればエルロー大迷宮からあまり離れていない所なら襲われることはないけどさ」

「それが問題なんだよな……まあ、とりあえずこの迷宮とはおさらばだあー！」
と、言つて蜘蛛子は出口へと突る。

そして、出口の近くに建つていた……というか出口の見張り番みたいな所が吹っ飛んだ。

おい。

「蜘蛛子おおおー!？」

「ゴメーン！」

俺達は急いで逃げた。

正直、あれで怪我をした人は多くいるだろうが死んだ人はいないはず。

こちらとしては出てただけどわざわざ魔物を通してくれるはずもないから強行突破。

でも……やつぱもうちよつとマシな脱出があつたのでは？

さて、外に出て数十分。

俺達は森の中を歩いていたのだが、すんごい事が起きてしまった。

なんと、大迷宮にいたあのマザータラテクトが蜘蛛子を引き戻すために大軍を送り込んできたのだ。

まあ、他の捕食者に多くは食われているのでとても多いわけではないが。

「蜘蛛子はアシスト頼むぜ！」

「おうさ！（にしても外道無効があつてホントに良かったあ）」

俺はゴッドガンダムからガンダム・バエルにチェンジする。

「バエルの力を見るがいい!!」

「堂に入ってますなあ」

そこからは蜘蛛の血肉が舞い踊り、バエルの装甲に蜘蛛にしては赤い血を塗りたくる。

バエルソードが蜘蛛の頭に刺さり、蹴飛ばして爆散。

連続で斬り捨て、変態機動で敵を蹂躪していく。

「シャアアアー!!」

「バエルを持つ私に逆らうか!」

翼のレールガンでデカめの蜘蛛の体を穴だらけにする。

「見よ!これが力の象徴……暴力だ!」

「うひゃー! (彼だから) カッコいい!」

さらりと本来の^{マッ}パイロット^キをデイスるが問題ないだろう。

外に出てする事はあんまりないが、しばらく別れて活動しようと言う話になった。

俺としてはあんまり彼女を一人にしたくないのだが、彼女が自分自身を強くしたいということではばらく別れると言う話になった。

「んじや、また会おうぜ」

「おうよ！……勝手に死んだら許さないからね！」

「死にはせんさ。だってモビルスーツだし。壊れたら蜘蛛子が直してくれよ？」

「……解った！ やってやろうじゃないの！」

鋼鉄の腕と蜘蛛の脚をコツンと、グータッチしてそれぞれの道を進んだ。

また会える。

しばしの時を、一人旅で強くなることを決意した。

episode 12 ゴブリンの村で

俺と蜘蛛子が別れて三週間。

のんびり気ままに一人旅。

スキル「マッピング」がカンストしてくれたので、マーカーを着ければ一人でマッピングする必要もなくなるので、蜘蛛子にも渡している。

位置が解るし、蜘蛛子が通って見た地形がマッピングされてこちらでもどんな地形か解って、それを彼女にも教えられる……マッピングサイコオオー!!

さて、俺の目には集落……みたいな村があるのだがよくよく見ると住人はゴブリンの模様。

そして、レーダーには大人数の人間がこの村に近づいている。

警告を出すべきかと思ったが、出したところで人間たちはフル装備だろうから、貧弱な感じのゴ布林たちでは無理に近い。

「……………別に人助けなら殺しちまっても大丈夫だよな？」

俺は愛用のルプスレックスの形態になりながら、村に近づく。

最近手に入れた「ニュータイプ」というスキル。

普通にスゴい。

それによる予知があつたので、こつちに来たのだが……まあ、一方的に蹂躪され殺されるなんて誰もが嫌だと答えるだろう。

しかし、あの人間たちはそれをしようというのだから問題ないよな？

「っ！貴様！何者だ!？」

「…人間が近づいてきているぞ」

「何だと?」

「いいから早く逃げろ。村は俺ができる限り守つてやる!」

「………そんなことを言われても……!？」

弓矢が、彼らの頭上に落ちてくる。

それを俺はギリギリティルブレードで弾いて威力を殺す。

「…これで解つたろ。早く逃げる準備を」

「す、すまない!助かった!」

こうされてはさすがに疑う余地はないだろう。

門番をしていたゴブリン二人は避難を促す。

「さて、俺は殺りますか」

スラストアーに火をつけて、俺は敵陣に突撃する。
蹂躞劇の始まりだ………！

「っ!? 何ガハアツ!?!」ドサツ

「ヒツ!?!」ゴシヤアツ

「あ……あ……!?!」

前にいた二人を刀で斬り殺し、その後ろにいた人間を体の重さで押し潰してミンチにする。

人間にあんまり思いやりとかがなくなつた時点で、俺はもう人間じゃないようだ。

だが、だからといって人間に絶望するような事はないし、結局あくまで俺の心は、器は人間だ。

「ギヤアツ!?!」グシヤツ

「グオツ!?!」ズドツ

「た、たす」ズバンツ

彼らにとつては悪夢だろう。

ただのゴ布林狩りが、人間狩りになるなんて。

「何でだよ!?! 何でツ!?!」ドスツ

「ヒイイイー!?!」

「…うるさいなあ…」。パン！パン！

「ガッ!」ドスツドスツ

両腕に内蔵されているキャノンを発砲して、チマチマと殺していく。

血飛沫が俺にかかるが、問題ない。

何故かいつの間にか流れ落ちるし、血液を浴びたからってすぐに支障が出るわけではない。

まあ、ツインアイの目にかかるのと視界が塞がるからあんまり目の部分にはかかってほしくないけど。

「な、何でもするからたすげっ!」バゴンツ

醜く命乞いをするフルメールの男を巨大なバトルメイスでホームランする。

「や、やめ」ゴシュツ

「止めてくれと彼らが言ってもお前らは止める気ないだろ？だから俺も止める気はないぜ」

「やだああー!」ガゴンツ

「ヒツ!や、やめ」ゴギツ

「ギヤアアアアアアアアアア!」ドシユ

悲鳴が上がる度に、赤い花と肉片が飛び散る。

前世での俺が見たら失神してたかもな。

だが、エルロー大迷宮での経験で無理にでも慣れるしかなかった。

だから、殺すという行為には最早疑問はない。

何故なら、コイツらは害悪だからだ。

「母ちゃあぁー」ズンッ

「マ」パンッ！ドスッ

…なにも言うまい。

映画とかでよくあるシーンではあったが、やっぱり目の前でママとか言わないで、いい歳したオッサンが言わないで。

それから数分後。

幾人か取り逃がしたが、全滅させた。

村に戻ると、ゴブリンと人間の死体が幾人か広場に集められていた。

まあ、人間の場合は適当に雑に置かれていたが。

「先程の旅人殿……」

「礼なら大丈夫だ。別に通りかかっただけだし、平和な村に襲撃があつてそれを見ぬふりもできなかつたしな」

「いえ、それでも礼を言わせてください我々を助けてくださったのだから」

一応、念のために後方にスキルでグシオン、フラウロス、ガンキャノン呼び出して

おいたが、大丈夫のようだった。

「なら……しばらくここに滞在させてほしい。自分は魔力と水があれば長い間動けるので」

「ふむ……ならば……ラース！」

「はい！村長！」

「この御仁の世話をしなさい」

「解りました！」

まだ子供だな。

だが、何かがある。

なので、鑑定してみた。

「!!」

「どうしました?」

「いや、何でもない。今のところはな」

とりあえず、彼とはゴブリンたちとは離れた場所で一度話し合おう。

「さて、ここまで来たならぶっちゃけれるな」

「??」

とある小屋のところまで案内された俺は、ラーズと呼ばれた子ゴブリン……笹島京也に改めて自己紹介する。

「改めて、今の形態での俺の名前はガンダム・バルバトスルスレクス。俺の前世は操騎王牙^{アヤキオウガ}。解るか？」

「は!?!ま、まさか転生したのは俺だけじゃ……!?!」

「そうみたいだ。蜘蛛子…じゃなくて若葉姫色^{ワカバヒイロ}も俺と同じく転生してたし、多分多くは人間が魔物になつてははずだ」

「それにしては……お前はロボットだな…?」

「なんか転生したときにガンダムになりたいだとか思っていたから……みたいらしい」
「……………」

軽くドン引きする笹島ことラーズ。

「引かないで！俺としては軽く思ってただけだし、ほんとになるとは思ってたし
！」

「……ともかくとして、確認できたのは俺と蜘蛛子っていう女子か」

「蜘蛛子がいたら「蜘蛛子言うな！」って言いそうだなw」

その後、近況報告してその日は一旦の終わりを迎えた。

ちなみにその小屋はラーズの自宅らしく、妹さんもいるようだ。

思ってたゴブリンの見た目ではなく、まあまあ人に近い姿で醜悪……という感じでもない。

そんなわけだから妹さんは可愛らしかった。

ちなみに、ゴ布林たちは知能が低い方であるため、話せても片言らしい。

でも、意思疎通……というか言語での会話が成り立っていたのでステータスを改めて鑑
定で確認すると、いつの間にか進化してた。

L v 191

ガンダム・バルバトスルプスレクス

NEWスキル

・【相互理解】

【言語理解】の発展型。【言語理解LvMAX】で進化する。ただし、スキル【ニュータイプ】、もしくは【Xラウンダー】、【イノベーター】と【思念】を持つものでしか入手不可。

思念による会話を解析時間なしで成立させる。

ただし、対話の意思があるもののみに限られる。

・【石破ラブラブ天驚拳】

新密度が高い異性が近くにいると発現する。

石破天驚拳が究極石破天驚拳になる。

任意で使用可能。現在のパートナー【蜘蛛子】

ちなみに、名前が蜘蛛子なのは俺がそう呼称しているためだとか。

side 管理者D

「あ！そういえば王牙の名前、なしのままだった……小さく付け足せば良いか」
これが原因で、彼女のサボりが発覚するのであった……

episode 13 旅は道連れ

次の日、スリープモードから起きると妙に久しぶりの感覚がした。そう、眠気だ。

「おはよう、バルバトスさま……ええっ!？」

「どうしたく……へ?」

「………ラース、俺って今、どうなってる?」

と言ったらラースが無言で鏡を持ってきた。

取手の部分に血が少しこびりついているのを見ると、どうやら昨日俺が殺戮した人間の中にいた者のものらしい。

そして、鏡を覗くと……

「B (P Z B Z I ∞ K | B E 彡) ……ただ今、再起動を実行中です。しばらくお待ちください」

オーバーヒートしてみたみたい。

とりあえず、この姿は人間態と名付けることにしたが……綺麗で可愛いなあ、我ながら。

別に過度な自画自賛な残念な人格になっただのではなく、ただ本当に綺麗なのだ。見た目は「はたらく魔王さま！」の鎌月鈴乃で、髪は青くなっている。

女性みたいに白い肌は、マジで女だがぶっっちゃけよう。
両^両方^性にな^具れる^有のである。

この状態は、本来の姿より弱体化するが流体金属生命体なのでメンテナンスや魔力と水の補給も、食事で賄える。

そして、斬られても流体金属生命体なので又ツと斬られて又ツと元に戻る。いわゆる、軟体動物を究極にしたものである。

欠点というと、全ステータスの大幅なダウン（とはいえ、軽く人間を掴み殺すことも可能）と結局攻撃魔法は使えないということ。

ロボットはロボットであるべきみたいな宿命でもあるのだろうか？

ちなみに、今の俺には股間には何も無い状態だ。

オスにもメスにもなれるって、流体金属生命体って何者やねん。

後、調べてみたら体の見た目や体格とかも変えられるみたいだ。

勿論、限度もあり最大で百メートルほど、最低で五センチほど縮められる。

それと、モビルスーツ形態には念じることですぐに戻れた。

「男の娘だな……………」

「止めてくれ!?!……………まあ、ブサメンよりはマシか…」

「可愛い!綺麗!」

うむ、複雑だよ。

でも、これでモビルスーツ形態での弊害も少しはなくなるはずだ。

硬いからな……………あの形態……………

声も中性的で、マジもんの男の娘だわ。

「……………ラース、一緒に来ないか?」

「え……………」

「無理にとは言わないよ。でも、他にもクラスメイトがいるかもしれんし、この世界は弱肉強食。強くならなければ身を守るにも一苦労だ」

「……………妹を置いていけない」

「俺にはコクピットがあるから……………乗せられるぞ。そう簡単にはやられないし、例えコ

クピットが潰れても強制排出されるみたいだし」

「……………少し、話させてくれないか？」

「……………良いぞ。でも、明日には出るつもりだ。そろそろ蜘蛛子と合流しようかと思ってるから」

「急かすわけではないが、そろそろ合流しようという期日が来ている。」

一日か二日なら待つてはくれるだろうが、長く待たせると今度は俺達が全速力で彼女を追いかけないといけない。

それはダルいからやだなんだよね。

だって、蜘蛛子【韋駄天】持ってて速いし。

さて、次の日になりました。

彼らともお別れだ。

人間態になったときには驚かれたが、そう警戒することもなく、普通に接してくれた。結局のところ、巷で聞く魔物と人間の戦争だなんてお偉いさんたちの都合でしかないんだよね……………

「で、ラーズはどうするんだ？」

俺は出口まで来て、彼に聞く。

村長たちは快く送ってくれるみたいだが、問題はラーズである。

ラーズが来るなら、妹である彼女も来るだろう。

まあ、それくらい対価だと思おうしそもそもその話、彼女にもどうやら大いなる力が眠っているようだ。

「俺は……………俺も行きます。村長、みんな、ありがとうございます」

「……………そうか、なら行ってこい。我々は何時でも君達を待とう」

何だか気まづくなつたが、ずっとそう考えるわけにもいかないの、とりあえずまづは妹さん……ライラをコクピットに入れる。

彼女は面白そうに、そして好奇心満々でコクピット内を探索して眠つた。
一応、寝心地はいいみたいらしい（蜘蛛子とレース談）。

さて、蜘蛛子との合流地点までの間にレースとライラのレベル上げを行わせてもらう。

とりあえず、俺が弱めた魔物をレースもしくはライラがとどめを刺す。

どんな状態であれ、倒したやつに経験値が入るのでとにかく弱めたやつを倒している。

レースには特殊なスキルがあり、武器を何もないところから作り出している（と思う）。

俺のと似ているが、何故か俺は固定されたものしか作れないし、レースも似たものは作れるが強度とかは全然。

俺が使ったら折れた。

何にせよ、強くなっていることには変わりはなく、進化先もそろそろ出てくるのではと思うこの頃。

二人ともオーガに進化したので、万全な雑魚を相手に二人で戦う訓練をしてもらった。

それなりに上手くなれば今度は一人ずつ……という感じで強くしたのだが、いつの間にかレースには【憤怒】というスキルを入手して、ライラは文字化けして読めなかった大いなる力の一つ、【無限収納】を手に入れた。

ちなみに、このスキル。

あの英雄王ギルガメッシュの有名な「ゲートオブバビロン」さながらの攻撃ができる。

つまりは、収納したものを射出できるのだ。

最速で亜音速くらいまで飛ばせるが、欠点としては生物・有機物・無機物問わずに収納できるが戦いに転用するには、とりあえずとにかく収納しないとイケないことだ。

石でも亜音速までいけば、龍に脳震盪ぐらいは起こせるだろうが在庫が切れれば何もできない。

なので、ライラには頑張つて色々な物を道中収納してもらおうことにした。

俺達で作った武器やその破片なんかも回収しているようだ。

ギルガメッシュとは違うのだよ、ギルガメッシュとは！

ちなみに、ラーズが憤怒で暴走したときは何故か人間態だと使える
【超ジャスタウエイ万兵器製造】で正気に戻した。

なんか解説欄には「大抵のことはこれで済む」なんて書いてあったし。
でも、製造してみても悟った。

「神ギヤグマンガ
銀魂やん!？」

episode 14 転生者

さて、ここに来るまで少し日数が空いたのでちよつとエルロー大迷宮生
ま
れ
故
郷で戦いまくつたらなんやかんやで鬼人になってしまった。

で、蜘蛛子と合流。

「え、転生者？マジイ？」

「笹島。でもまあ、覚えてなくても仕方がないか。エルロー大迷宮では色々あったし」

「うーん、記憶が……まあ、確かにエルロー大迷宮では色々あったからねー」

「……あああああー!!進化するの忘れてたあああー!!」

「うるさああい!!」

「うるさいです、バルバトス様」

「ううう………こんな女の子って進化は早いものなの？少し前はまだ小学生ぐら
いだったのに」

「俺も驚きだよ。まあ、そうかは俺は知らんけどな」

「にしても、男の娘……ね……」

「や、やめろ蜘蛛子！その目はやめろ!？腐女子の目をしているぞ!？」

「蜘蛛の目ってどんな目なんです？」

「こんな目だよ！」

まあ、わかるはずもない。

とりあえず、適当に歩いてエルロー大迷宮から離れる。

「並列意思たちは無事にマザーさんに取り付いたの？」

「うん、でも最近は連絡がまちまちだからね……まあ、大丈夫でしょ！」

「ラースもライラも、進化したためか落ち着いてイケメンに美少女になっ
ている。ラースも十分強いのだが、特殊なスキルのおかげでライラもかなり強い。」

「そして、何気に俺にめっちゃ懐く。」

「今の状態は、いわゆるツンデレというものでしょうか？」

「辛辣な時もあるけど、大体は甘えてくる。」

「なんなんそれ？」

「あれ？なんか馬車が襲われているみたい」

「崖下に確かに貴族の馬車みたいなのが、山賊に襲われているようだ。」

「フム、んじゃ、殺るか」

「え!？」

「ん？何か不満か？」

「いやだつてさあ、別にどうでもよくない？わざわざ人間を助ける必要性もないし」

「……別に俺も必要性は感じない。でも、熱源センサーで馬車の中を見たら赤ん坊が
いるんだ。せつかく生まれたのに死ぬなんてあんまりだろ？いづれ、この世界が終わる
かもしれないとしても」

「ん？何で世界が崩壊することを知ってるのかって？」

そりゃ、蜘蛛子に教えられたから。

でも、ぶつちやけそうなるなら俺の進化先に崩壊を止められるかもしれない物がある。

「…それってなんだ？」

と、笹島………じゃなくてラーズ。

ちなみに蜘蛛子との会話は俺を介しています。

「ユニコーンガンダム。巨大な質量……隕石や星さえも押し返せる力を持つ機体さ」

と、以前話したがライラは疑問ながらも信じてラーズは多少は納得している。

信じていないのはちよつとしようがないかな、というところはある。

「んー、まあ確かにねえー…」

「それにユニコーンガンダム進化に繋がるからな」

「解った！よし、レッツゴー！」

「ラース、ライラ、そこで見てる！」

「了 解！」
サイイエツサー

「え？軍隊ですか!？」

俺は山賊の所に飛び込む。

馬車の操作をしていた執事が斬られそうになったところを、俺はルプスレクスの腕で受け止める。

PS装甲があるおかげで、物理は無効だ。

それに、元々の装甲の強度もあるからかなり強いぜ。

「執事さん、下がれ」

「…!」

俺はアイアンネイルで一閃。

山賊のリーダーらしき男の顔が、原型すら解らないほどに抉れた。

テイルブレードを射出して、後ろから斬りかかってきた山賊の心臓を突き刺して殺し、腕のキャノンで山賊たちに風穴を空けていく。

「ギャアアアーツ!?」

「ヒイツ!？」

「た、たす」グシャツ

………あー、以前にもこんな感じで人間の大軍を壊滅させたよな……あれは色々凄惨なことになったな。

道が血に濡れて、周りにあつた草木も赤く染まりすつごい状態だった。

まあ、雨が降ればそれも流れ去るだろうが。

殲滅を完了した。

俺は斬られた彼らの護衛たちに、人間態になつて近付く。

俺は治癒魔法は使えないが、物理的に回復させることは人間態なら可能だ。

とりあえず、ジャスタウェイを製造して腕の部分をポキリと折る。

それを粉みたいに細かく砕いて傷口にかければ、少し時間はかかるが塞がる。

モビルスーツ形態に戻つた直後に、馬車からいかにも貴族な男女二人と女性の腕の中に収まっている小さな赤ん坊が現れた。

「……………！貴方様は武神バルバトスでは!?」

え？何でその黒歴史過大評画を？

「ありがとうございます！我々を助けてくださって！」

「いえ、お礼を言われる程では。通りかかった所であっただけですし。少しすれば彼らも回復しますので」

「なんと……………!?!」

「まさに生き神様ですわ……………!」

「いや、さすがに死人を蘇らせることはできませんよ……………ツ!?!」

「どうしました?」

「……………その赤ちゃん、少し近くで見ても良いですか?」

「そ、それぐらいなら…喜んで!」

完全に俺のことを神様扱いやなw悪魔なのにw

しかし、まさかな。

まさかここでまた転生者に会えるとは。

しかも、オタク仲間。

「この子の名前は?」

「実は……………まだ決めていないんですよ」

「女の子なので、ソフィール、ユーリイ、リユカの三つまで絞ったんですが……そうだ！バ
ルバトス様が名付けてください！」

えええー!?

確かに名前が空白だからないんだろうなって思ってたけどさあ………まさかの赤
の他人(?)に名付けてもらうって………ほら、赤ちゃんも驚いてるよ、さつきから
ちよつとビツクリ顔だけどさ。

でもまあ、何だかんで嬉しいところもあるんだけれども。

「根岸、今世でもよろしくな」

「ッ!？」

顔を近づけて言ってみたら中々の反応w

「どうしたんです?」

「いや、おまじないを。それで名前ですがソフィールから頂いてソフィアで」

「おおっ!ありがとうございます!」

「ああ、そうだ。その子はいい意味でも悪い意味でも特別だ。気味悪く感じるときもあ
るかもしれないが、大事に育ててやれ。愛を込めて育ててやれば応えてくれるよ」

「ありがとうございます!」

「神様……ねえ？」

「やめてくれ、ラーズ。人間たちの戯れ言や」

「神様……………確かにバルバトス様は神様みたいな人ですね」

「やめてくれ!？」

武神バルバトスとして有名になった主人公。

本当に神になって、しかも新たな宗教として武神教が後に生まれるのだが今はそんなことを知らない。

episode 15 ジヤスタウエイは正義！それ以上でもそれ以下でもない！

さてさて、馬車を見送ったのだがまだ不穏な影が。

「よし、子供以外は全員殺害だ」

「プランBに変更だな。あまりやりたくはなかったが」

「しかし、あやつらは失敗したのだ。やるしかあるまい」

なんかエルフみたいなやつらが、ぶっそうな物を手にしてあの馬車を狙っている。

「ラース、ライラ。殺れるか？」

「もちろんだ」

「もちろんです。バルバトス様」

.....
複数の男の悲鳴が奥で聞こえたが、それを聞いた者は俺たち以外にはいない

で、適当に歩く。

なんか行きたい方に適当に歩くってなんか楽しいなあ。

時たまフルーツをもぎ取って食べたりしたが、うん、人間態は良いねえ。

男の娘なのが少し頂けないが、別に気にするほどではないのでそのままだ。

「そーいや、マザーはどうしたんだ?」

「マザー? あー、とりあえず並列思考で生まれた魔法担当1と2、体担当に任せてる」

「並列思考……えげつないな」

「バルバトス様、蜘蛛子様は何者なんですか?」

「ん？許嫁」

「……………二番目でも良いので、そばにいさせてくださいね？／＼／＼」

「ら、ライラアアー!?!」Σ(。D。)

「……………」(・D・)

「モテモテですなあwバルバトス君」

唐突の告白に、俺は思考が数秒ホワイトアウトして体の維持が不安定になった。

つまりは、溶けかけてる。

「はっ!」

「スゴい作画崩壊だったなあ……………」

「ライラ…………お兄ちゃんを捨てないでくれよ……………??」

「?お兄様の事も大切な人だと思ってますよ?」

「ライラアアー!!」

完全にキャラ崩壊したラースだった……………

そんな時である。

俺達は後退しながら、牽制しライラの準備をさせる。

ライラは先に奥まで後退してもらい、ラースはその中間辺りで障害物を作る。

俺は牽制と囷をする。

蜘蛛子は好きなようにさせるが。

「ライラ、準備は!?!」

「行けます!」

「ジャスタウエイ弾、撃てええー!!」

大量のジャスタウエイが、亜音速でマザーにぶつかる。

同時に爆発を起こし、ジャスタウエイに施された幾ばくかの状態異常がマザーに振りかかる。

まあ、そちらの効果に関しては期待はしていないが。

「キイイイイー!?!」

「あの時とは違うんだ!ギヤラクシーキャノン!」

「それダサくない!?!」

「お兄様、それは男のロマンというものでは?」

「何故に男のロマン!?!」Σ(。D。)

何故かライラが男のロマンというものを理解しているが、本当だろうか……??

妹分ができたなら、心におっさんを飼っている様子が何故か容易に想像できた………それをリースも感じたのか。

「ライラー！ライラーにはまだそれは早い！」

と、言い出した。

いや、今戦闘中だぜ？

あーだこーだと言える暇はないと思うんだが………まあ、それくらいリラックスできれば良い方か。

と、そうこうしているうちに蜘蛛子がマザーの足を切断（何度か鎌で斬ってたけど）、動きが鈍くなる。

ジャスタウェイはもう後の戦いを考えて今は出さないが、それでもかなりの体力を削れたようだ。

「よーし、近接やるか！」

「脚、食えますかね？」

「お兄様、どうせならデカイのをお願いします」

「……………（何故かあの二人に脚を食われる未来が見えたあ!?!）」（（ ; ㇿ ））
さりげなく蜘蛛子に恐怖を与える鬼人兄妹だった……………。

さて、マザーは脚を斬って頭をバトルメイスで叩き潰して調理したが、その前に配下たちに全軍突撃の命令を出したのか、とてつもない数の蜘蛛たちが俺達に襲いかかる。だがしかし、それは無駄である。

「ソロモンよ！私は帰ってきたよ！」

「ソロモンなんてねえよ！」

「ソロモンって何ですか？お兄様？蜘蛛子様？」

俺の発言に、蜘蛛子とラーズはツツコミ、ライラは純粹に疑問を抱く。

それにラーズは色々説明しようと、手振り身振りで説明する。

ちなみに蜘蛛子は喋れないのでラーズに任せて、転移で湧き出ているだろう迷宮の元へと向かって転移していった。

「散れいッッ!!」

俺は現在の変更可可能な機体の中で殲滅力に長けた武器を持った、G P O 2 こと、試作ガンダム2号機【サイサリス】になっている。

もちろん、核バズーカ持って、今撃とうとしています。

え? 環境被害? 大丈夫、放射能はなんの作用か高レベルの進化魔物なら後遺症などなく、環境汚染も3年以内にはなくなる。

魔法ってホントにスゴいね。

もちろん、後で人間が近寄らないように警告する看板を立てるけど。

さて、爆発の光はとても凄まじく、サイサリスの専用シールドのラージ・シールドでラーズとライラの身を隠させて、自分もスラスターを全開して吹き飛ばされないように耐えている。

爆風が収まれば、そこは阿鼻叫喚の惨状。

跡形もなく消えたのが多いが、幾つかは焼け焦げた状態であり、触ればすぐにでも崩

れて灰になりそうだな。

「……………広島や長崎の原爆も、こんな感じだったんだな……………」

「……………そうだな」

俺とラーズは、思わず前世の話をする。

サイサリスの核弾頭は、多分過去の日本に落とされた原爆よりかなり威力や効果範囲が広いだろう。

しかし、同じ核爆発による攻撃。

それが広島・長崎に落とされたのだ。

撃った俺達としても、やはりこの武器は危険すぎる物だと感じさせた。

つか、これ岡ちゃんに見られたら思いつきし殴るかもな。

まあ、魔法のおかげか何かは知らんけど、二次被害も近寄らなければ基本は死なないのだ。

しかも3年以内にはなくなる。

前世のよりはずっとマシだろう。

蜘蛛子が戻ってきたときには、某有名なハンティングゲームのこんがり肉を焼くときのBGMを俺が並列思考でできたもう一人の俺こと【翻訳・音楽担当】に流してもらっている。

え? 音楽担当ってどういうことだっけ?

俺の記憶にある音楽を、音楽担当に機械だからこそ変換できるため流しているのだ。流すのと焼くのを同時にはできないしね。

BGM：上手に焼きましたー！

もちろん、肉はマザーの脚。

意外と中の肉は焼いて塩をまけば美味しい。

ちなみに他にも普通にこんがり肉や、魔物を倒して美味しかった魔物の肉をこんがり肉とかにして、ライラの無限収納に入れてもらっている。

肉焼きセットは自作で、ラースと一緒に作った。

材料集めんの色々大変だったぜ……………いつか量産しようか？

絶対に売れるだろ。

「こ、これが（マザーの）こんがり肉……………！」

「毎回焼くときにそのBGM流すのかよ」

「肉焼きならこのBGMしかあり得ないだろ!?!ラース！」

「お兄様、私はこのびーじーえむ？とやらは好きですよ。何だかうキウキします」

「……………まあ、俺もわかるから良いけどさ」（思考放棄）

なんやかんやで楽しい夜になった。

ちなみに蜘蛛子がああなマズを狩ってきたのだが、これもこんがり肉にするとさらに美味くなった。

「『上手に焼きましたー！』」

episode 16 こんがり肉は魔王様にもご好評の ようです

さて、こんがり肉のパーティーをして数日後。

俺達は大海へと歩を進めていた。

「いやあー、こんがり肉は蜘蛛にも魅力的な味だなあ」

「バルバトス様は天才です！あんな美味しいのは久しぶりです！」

「バルバトス、アレは最高だ。いつか量産しようぜ！」

蜘蛛子、ライラ、ラースと言った面々にも高評価。

モンハンライダーズではフレージャーをかけて、回復とバフを同時にできたがこの世界ではどうなのだろうか？

まあ、ともかくとして将来、肉焼きセットが量産するというのが増えた。

しばらく歩き続けると、海に出た。

蜘蛛子は蜘蛛糸で器用に小舟を作り、釣りに出かけて行った。

あとついでにあの迷宮でヤバイやつがいたらしいので、ソイツを倒すようだ。

転移か………良いなあ………

で、俺達は何をしているかというところ、肉焼きセットの改良と予備で2つ作っている。

俺が一番人間に近いので、町に言って材料を集めるのには時間は少しかかったが集められた。

モビルスーツ形態だと、逆に良い意味で目立って大変だ。

俺達の肉焼きセットはまだ折り畳み機能がないので、試行錯誤しているのだがなかなかこれが難しい。

で、その合間に俺達はこんがり肉の味の追求をしていた。

「いやあ……うんまいね」

「焼き魚………に塩をー」ファサ

俺はのんびりこんがり肉。

ラースは獲ってきた魚を焼いて、この海で作れる塩をかける。
ちなみに、岩塩も取れるときは取っている。

おかげで一時期は俺のkokopittoが調味料や肉、魚とかでギユウギユウ詰めになったことは、今では笑い話。

「バルバトス様、このチーズフレーバー美味しいです」

ライラは最近チーズにハマっている。

太らないか心配だが……

「乙女は太らないのです」

と、何故か自信ありありで断言した。

一応、程々にしろとは忠告したが……大丈夫だろうか？

こんがり肉を食つてると、突然、女が現れた。

しかし、気配からしてモンスターだ。

俺は警戒したがすぐに警戒を解くことになる。

何故なら……

「ねえねえ、それ私に出来ない?」

目を輝かせてこんがり肉を見ていたのだ。

しかも、これは人間の中では中々手に入らないと言われる魔物の高級肉だ。

「……半分なら良いか?」

と、聞いてみる。

一応、あと一つくらいはあるのだがホントに中々手に入らないのでできるなら全部食べたい。

「……………しょうがないな。半分だぞ」

負けてくれて何より。

俺は腕を刀にしてスパツと半分に斬る。

「へえ、人間ではないかと思ってたけどそんなことができるんだ。スライム?」

「うーん、スライムかどうかと聞かれると違うんだけど……まあ、似てるっちゃ似てる

かな…よく解らない。あ、これどうぞ」

「フムフム。ガブッ」

威勢よくかぶりつく。

するとどうだろう。

さらに目を輝かせて、ガツガツと食う。

あつという間に食べきってまるで何かを欲しがらる犬のように、次なるこんがり肉を要求する。

「もつと！もつと他にはないのか!？」ダラダラ

「わ、わかった！沢山は無理だけど、出すよ！ちよいと待つて！」

と、俺は言つて彼女を連れて肉焼きセットの前まで連れてきた。

「わあ…何これ?」

「肉焼きセットつて言います。まだ試作段階ですけど」

「バルバトス様、その方は?」

「ライラか。この子は…えーと名前は?」

すると、彼女はちよつと威圧感出して言った。

「私はアリエル。魔王だよ☆」

「へー」

「……もうちょつと何かアクションが欲しいな……」
「なんやかんやでへこむアリエルだった……」

そして、こんがり肉をたらふく食べた。

様々なフレーバーや、究極のこんがり肉の焼き方を試行錯誤しているうちに夕方になつた。

そろそろ蜘蛛子が帰ってくる頃だとは思うんだけどなー。

「こんな美味しいの食べたことないよおー！」

「お気にめして良かったです！魔王様でも、バルバトス様の物にはかなわないようですね！」

いやいや、そんなこと言わないで。

一応その人魔王だよ？

勝てるかも解らない相手だよ？

いくら頑丈な装甲があるとしてもさ。

「あれ？ラーズは？」

「お兄様なら漁に行きましたよ。どうやら焼き魚がお口に合ったようです」

「まさかとは思いますが、魚人とかになつてないよな……………？」

何となくそんな想像しながら俺達はラーズの帰りを待った。

アリエルは探し物があるみたいなので、海に飛んでいったが。

「にしても、オリジン……………原点か」

あの娘は蜘蛛の魔物で、最初の魔物の一つ。

きつと、俺達転生者よりもずっと長いときを生きているのだろう。

そして、食べてる姿はめっちゃ可愛かったね。

かわゆい。

「……………」ゴゴゴゴゴゴゴ

「……………」

何故かライラに圧をかけられたんだが……………心当たりがないぞ？

次の日、結局蜘蛛子は帰ってこなかった。

入れ違いでラースが帰ってきたけど、なんで海竜狩ってきたんだろうね。
まあ、美味しく頂くけど。

「んじや、【ドダイ改】召喚」

今の進行度はZZ。

多分、このままZZガンダムまで進化してもユニコーンにはなれない。

なので、そこからまた運だけになる。

「よし、行くぞ〜」

蜘蛛子捜索の旅が始まった……………？

一方の蜘蛛子

「陸地からめっちゃ流されたけど、これほんとに大丈夫なのかなあ？つーか、いい加減そろそろ体治って！そして、バルバトス早く助けに来てえ〜!!」

と、頭だけの蜘蛛子は叫んでいたとかいないとか。

ちなみに、俺達が魔王とこんがり肉を食っていたことを知ると、ブルー文句言つて高級肉をこんがり肉塩フレーバーで丸々一個食われるのだが、それはまた別の話。

sideアリエル

最初は邪魔になりそうだから殺そうかと考えていたが、あの匂いをかいだ途端よだれが止まらなくなった。

そして、私はまるで人間の乞食のようにガツガツと食べた。

本当に美味しかった。

人間の知恵は、悔れないと解ってはいたがこんな事も思い付けるのだ。
いや、厳密にはあれは人ではなかったが……妙に人間臭いのだ。

彼女は。(性別を間違えられた主人公(笑))

「でもまあ、何であれバルバトスちゃんとはまたいつか会おうかな♪」
そのいつかがすぐそこに迫っているのに、私は気付かない。

episode 17 無人島での大騒乱

さて、サブフライトシステムS F Sで海上を飛んで蜘蛛子の移動先を追いかけている。

だが、ぶつちやけS F Sの燃料が足りるか不安だ。

まあ、変えていきや良いんだけどさ。

それでも朝昼晩ぶつ通しで飛ばせられるわけがなく、途中で無人島に降りることにした。

「もう夜だし、とりまここで寝ようぜ〜」

「まだ私は行けますよ、バルバトス様」

「ライラ、無理しちゃダメだ。休めるときに休めなきやいざという時にお前の好きなバルバトス様を助けられないぞ?」

「わかりました!寝ます!」

「……………」

何だろう、チヨロイン?

「バルバトス……とりあえずこっちに来てくれ……」

ラーズに連れてこられたのは鯨のような形のした崖の空洞だ。

そこなら、ライラに聞かれることはないだろう。

まあ、大声出せば反響して逆に聞こえるが。

「……なあ、王牙。正直に話してくれ。お前、うちの妹に何した？」

「何もしてないけど？」

「じゃあ………なんで優先順位が俺よりお前なんだよ……!？」（泣）

どうやら、妹に慕われなくなつてまさかオレガ何かしたんじゃないかと思つたようだ。

「俺だつてわからんさ!?! 予想だけど、まだ本来ならお前ら子供だろ? だから、その感じで精神年齢が追い付いてないんだよ………多分」

「頼れる兄貴になりたかつたんだが………はっ! まさか洗脳を!?!」

「できんわ!! 俺にはそういう攻撃は効かないかわりに使えもしないからな!………それに似た兵器は使えるけど」

「やはりかあぁー!?!」

「ちやうわ! まだそこまで進化してない! その姿はぶつちやけ、液体金属とモビルスーツがくつついた感じのやつだし!」

と、ギャアギャア騒いでいればそのうるささにやつて来るやつもいるわけで。

「ぐしやあぁぁー!?!」

しかしこの島、実は無人島ではなかったのである。

それに気づいたのはそろそろ夜明けなのではと思われる頃。

やらかしたことに俺達は頭を抱えたが、ぶつちやけここには誰もいないし魔物やらモンスターやらしかいないから、問題ない……と思っていた。

「……………そこにいるのは誰だ？」

「……………」

俺達がそこにいる、小さな気配を感知しそちらを見るとそこには……

「お、狼娘!？」

狼の耳を生やした、可愛い美少女がヒョコツと蛇の死体の影からひよっこりはん。

「貴方たちは……………何者なんです？」

「しやべったあ!？」

さて、結局彼女は何者かというところ元々はこの島は遥か昔に栄えた文明の秘密の研究所らしい。

その博士がやったのは人体実験。

人と魔物のハーフを作り出し、戦闘用や愛玩具用、奴隷などにして一儲けと自らの欲を満たすために作られたのが彼女たちのご先祖様らしい。

しかし、研究所は戦闘用、愛玩具用、奴隷の分類関わらず、反乱して研究所を機能不

全にさせたらしい。

機能不全にしたのは、まだ生まれてもない命のために一時的に無効化して研究員たちを殺すためだとか。

ともかく、最終的に研究所は閉鎖。

誰も近寄らずそしてこの事を知る人物たちはかなり少数だったため、時間と共にこの島のこととは忘れ去られたようだ。

その間はその文明の言葉を話し、読み書きし、そして弱肉強食の世界で増えたり減ったりを繰り返して、とある時に一人の人間がここに流れ着いて現在の言語を習得し、その人間の血が混じって人間に近い姿に種族は変化したそう。

ライラを起こして、彼女の案内でその場所に来れば、普通の人間の村とあまり変わらない感じだった。

村の人たちには歓迎され、色々話を聞かれたが皆この地域の特異性のせいかな、陽気で賢く、そして平均レベルが60台だ。

かなり強い。技量も、スキルも。

そして、女の子はめっちゃ可愛く、男は最早男の娘が多い。

彼女らに癒されながら、俺達はいずれまた来ると言い残して島を出ることにした。マッピングしたから、いつでもここには来れるしな。

だが………また色々と厄介というか、なんというか。

実は猫種の孤児がいて、その子の身寄りがいない上に引き取り手も中々上手く行かないのだ。

だから、彼女を強くするのと同時に育ててほしいと頼まれた。

まあ、俺が育てた人物が強くなっていくのは嬉しいし、喜ばしいので引き受けたが。

SFSで、また空を飛ぶ。

それに若干怖がりながらも、好奇心の目で海を見ているこの子はマリユー。

10歳くらいの少女だ。

「何だか蜘蛛子にモフモフされる運命が見えるのだが………」

「同感だ（です）」

「？」

まあ、ラースやライラもモフモフしてたがな。

もちろん、俺もだが。

episode 18 蜘蛛子と合流、で対話です

ようやく陸地に着いて、約三日。

マリユを強くさせるのと同時に俺もまたレベルを上げるために、ズゴックやらアツガイやらで水中戦闘で経験値を稼ぎまくった。

「稼働してるだけで経験値が少しずつでも溜まってくから、何というか楽だなあ」

「いや、チートではないでしょ。バルバトス」

「ラースがそう突っ込んできた。」

さて、適当に歩いていけば町が見えた。

屋敷も望遠で見えたし、後は蜘蛛子を探すだけか。

「よし、じゃあ今日はあの町まで行って宿泊させてもらうか」

「賛成……と言いたいのが俺達は鬼人だぜ？」

「そうですバルバトス様。どうやって行くのです？」

「そうですよバルバトスさん！」

まあ、こもつとも。

だから、首輪をラースに作ってもらいそれを皆に付ける。

「は？」（・・）？

「あ、あのバルバトス様？私を奴隷などにしなくとも、私はバルバトス様の僕なので

……………／／／

「バルバトスさん!?裏切ったの!」

「違う違う!これはちゃんとした理由がある!あとライラ!そんな顔しないで!本気でラースに殺される!」

俺は慌てて皆に説明する。

まず、俺は武人として有名ならしいし、冒険者たちの話でも大抵は俺の話も多かった。

貴族様まで、その噂は伝わっていたらしいな。

以前、蜘蛛子とまだエルロー大迷宮にいたとき、大金はたいて俺の力を利用しようと

した大貴族らしき男が下卑た顔で、配下になれとか言ってきたけど無視した。

それでもなまってほしいなら、俺の体に傷をつけられたら良いぞと言えば冒険者に任せ
る始末。

最終的に、気絶させて冒険者たちを労いながら出口まで送ったな。

ちよつと懐かしい思い出である。

閑話休題。

本題はその有名度を使って、ラースらは魔物である（マリユは客観的に見られると
魔物）ので俺が使役している、ということにすれば町に入れるだろう。

その事実を確実にするためにも、首輪を付けさせてもらったのだ。

「あー、なるほど」

「ムウ……………／／／」

「売らないんですよね!? 私を奴隷にして売る訳じゃないんですよね!」ウルウル

ラースは理解。

ライラは何故に拗ねるんだよ。

マリユは今だに引きずってる。

ちなみにレベルが上がって、今では体もそれなりにレベルアップと同時に成長してお
胸が普通より少し大きめな中学生といった風貌である。

猫耳可愛い。

綺麗な亜麻色の髪と猫の象徴たる猫尻尾は、目を引くチャームポイントだ。

後、機械なのにどこか欲情している俺がいるのだが、ホントに俺は大丈夫なのだろうか？

見た目は中学生とはいえ、まだ実年齢10歳だぞ。

色々アカンことになつとるぞい……………

てな訳で街へ入る門の場所まで来ました。

後、形態はバルバトスルプスレクスだ。

人間態だと解らんだろうし。

「誰だ！」

早速門番に聞かれた。

結構警戒されているね……まあ、わからんわけではないけど。

「えーと、俺はバルバトス。この連れは俺の……まあ使い魔というか使徒というか」

おい！ライラさん!?

使い魔とか使徒の所で体をクネクネさせるな!?

あと、マリユーさん!?

そんなに俺の腕掴まないで!?

何故か股間がはち切れそうな感じがするの!?

「バルバトス……その出で立ち………」

「冒険者を連れてきます。後、領主様にも報告してきます！」

………時間がかりそうだなあ。

思った通り、それなりに時間がかかった。

領主さんは何とあの時の。

フム、さてはこの町の人達から飯とか貰ってるからか？

まあ、何だかんだで俺達は諸事情………と言うよりも蜘蛛子の事でやって来たと言
う。

「えい！ ば、バルバトス様はあの蜘蛛を退治してくれるので!？」

「あ、退治はしないけど。エルロー大迷宮にいたとき、俺はあの蜘蛛………まあ俺は蜘蛛子と呼んでるんだが、まあ彼女を追いかけてきた感じなんだよね。だからまあ、彼女の言い分とかそういうのも解るし伝えられるから………まあ俺が知ってる蜘蛛子なら危害を加えないなら、何もしないぜ」

とか言っておいた。

とりま、今日は寝ることにした。

人間態の姿も領主さんや衛兵さんに見せておいたので、変に捕まることもないだろう。

翌日、朝早いうちに蜘蛛子がいるだろう場所に向かう。

「蜘蛛子ー！」

「はいはい」

意外と近くにいた。

とりあえず、まずは情報交換ということで最近の事を話し合う。

蜘蛛子からの話では、どうやらあの真祖のヴァンパイアちゃんがどうやら放っておけないらしく、しかも実際エルフに領主さんが危険に晒されたんだとか。

「ふむ。なら、蜘蛛子はまず言葉を学んでいかなきゃな」

「あー、それは確かにですな。私もそろそろ自分で話せるようにしておきたいし」

「領主さんには一応忠告しておくわ。で、蜘蛛子は神様の使いねえ……」

「……………私でも似合っていないのは解ってるよお！」

何だかんだで、しばらくあの町に滞在することになりそうだ。

episode 19 何やってんだああー!?

蜘蛛子がこの街に居着いて半年ぐらいだろうか？

蜘蛛子は何だかんだで領主さんの奥さんが神獣様だと、町の人に伝えてしまい、治せない病気やら何やらを蜘蛛子がやってしまったから完全に神様扱いで、いい生活をしている模様。

俺もまた同じような感じだし、なんとも言えないが少なくともこの町の人々や特に衛兵さんたちと、仲が良くなっている。

そのお陰か並大抵の魔物じゃ相手にならないほど強くなってしまったるが。

「やりすぎじゃない？」

「ハイソウデスネ」(棒)

で、強くなるのと同時に隣の国が迷惑なんだよね。

エルロー迷宮から俺と蜘蛛子が出たから、俺達は国のものだとか意味不明な事をおっしやるのだ。

魔物とは言えど、どこに行くかくらい自由だろ。

「ええいーあの蜘蛛もそうだが、貴様までー」

「あいにく、俺は誰のものでもない。俺は俺だ。あんたらに仕える理由がないんだよ」

「魔物ごときが生意気を……っ！」

「悪いが俺は魔物じゃなくて魔導兵器らしいんから、魔物じゃねえぞ」

「へ、屁理屈を！」

うーん、こりゃ再三謝らないとな………さすがにいい加減にどこかへ立ち去らんとダメか。

だけど、民衆の方々が離してくれないんだよね……

結果、蜘蛛子が殺してしまった。

「バツキヤロオ！」

「ごめんごめん!! 痛いから微妙な所の脚を引つ張らないで！」

「バルバトス様、引きちぎってあげてください」(^^)

「ヒエエエエーッ!!」、(；；；；；；；；；；) ギャアアア

胸くそ悪いのは解るが、ただでさえ迷惑をかけてる所に災厄をプレゼントつて最悪すぎだろ。

「……………加勢するか」

「ですな」

「だな」

「蜘蛛子さんもですニヤ？」ゴゴゴゴ

「はいいいいー!!?」

さすがに蜘蛛子が可愛そうなので止めさせるが、蜘蛛子に神獣とか似合わないねw

「というわけで、蜘蛛子共々責任取るために加勢します」

「それはありがたい……この街の兵士はバルバトス様のおかげで精鋭ですが、それも数に劣るのでありがたいです」

領主さんには歓迎……されたのか？

まあ、身内が原因なのだからこれで何もしなかったら名実^マともにでクズの仲間入りだ。

それだけはやりたくない。

というわけで出撃。

蜘蛛子と俺の一行を先頭に、軍は進む。

え？時間を飛ばしすぎだっけ？

………バトルと会話シーン、貴方はどっちがみたい？っていう話になります。

「経験値いゝ」

「おい、蜘蛛子？」

「何い？」

「俺達が先頭を切るから援護頼むぜ」

「そんなこと言わずに一掃しない？」

「別に相手が五万人だろうと、俺達なら余裕だろう？」

「そうですよ？ 蜘蛛子さん」

「ライラさん？ 私でもできることとできないことがあるんですけどおー？」

「蜘蛛子が原因だから諦めな」

「ラースまでえ!!」

とまあ、呑気に会話したり現れた魔物を瞬殺したりと特に軍自体に被害が出ることもなく戦場に着いた。

まあ、手荒い歓迎として魔法と弓矢の嵐が俺達に降り掛かって来たけど。

「蜘蛛子！」

「アイアイサー！」

蜘蛛子が结界を作り、飛び道具をガード。

その間に俺はスラストアーチャーを噴かせて、敵軍に急接近する。

後ろからも、ラースやライラ、マリユールが俺に付いてくる形で突撃する。

「ニヤイルビーバーク！」

マリューさんの因果か、現代兵器の召喚を可能にしていた。

【銃火器召喚】というスキルだったのだが、日本語表記だったのでマリューには理解できず、もし俺達がいなければ彼女はあの島で成長してもきつと惨めな思いをしていたのかもしれない。

ラノベとかでよくある展開だ。

まあ、あの島の住人は皆過酷な環境でいきる故か協調性や仲間意識が高いので（もちろん、個人差あり）苛められたりとかはないだろう。

それでも、守られる存在にずっとなるのは嫌だろうな。

ともかく、わざわざ日本語表記にしたこのスキル、マリューはそれに合わせたのか、それとも偶然か、自衛隊やアメリカ軍が来てそうな迷彩服を露出多めにした感じの物になった服を着用していた。

外見年齢中学生なのに、その見た目は不味いぞ……腹見せに豊かな胸がパツツンと出ているラースや俺、男衆には股間がつかった。

いや、そもそも何で機械であるはずの俺が股間を硬くできるのかよくわからんのだけども!?

「邪魔だ!」

最近レベルの上がりが遅いので、進化できていないがそれでも強力である。

「オラァー！とつと私の経験値になれえー！」

蜘蛛子は遊撃として、あちこち動いてもらう。

元々工作兵やら、普通に戦うにしても強いので遊撃が一番だ。

そして、一番苦勞するポジションでもあるがな！

俺は真正面で機体をチェンジして、ガンダムレオパルド・デストロイで、ビームやミサイルをぶちこんでいる。

誰も近寄れない状況である。

経験値がとにかく入るから、弾がなくならないぜw

あ、そもそも魔力が無限だから意味ないか。

でも、ステータス自体は上昇するし最近は進化条件のレベルが高くなっていくから今回の出来事は嬉しくもある。

「悪いけど、これって戦争なのよねえ！」

「やってる俺達というのがあれなんだが……」

「なんだ？ラース？」

「戦争じゃなくて虐殺な!？」

「お兄様、バルバトス様が戦争というのなら戦争ですよ?。」

「ちよつとちよつとお!?!私としてもこれは虐殺だと思おうよ!?!あえて言わないつもりだつ

たけど!!」

と、騒がしくしながらも敵を殲滅するのだから我ながらスゴいことをしてると思う。

「さて、あらかた片づけられたか」

「そうですねあ」

戦闘時間30分弱。

あつという間に敵軍は壊滅した。

「そう言えば蜘蛛子、アリエルは何してんの?」

「え? あー、さつき見たときは地龍と戦ってたよ」

「へー、じゃあなんでそこにいるんだ?」

「へ?」

そう、さつきからいたのだ。

魔王アリエルが。

「ええええー!?!」

「あ、それと進化するから。選択先はAGE-3なんでよろ」

前より短時間で進化が終わるとはいえ、時間はかかる。

ん? AGE-3になって何すんのかって?」

あくまで進化先だから、アリエルと戦うときは別のだぞ。

「オオオオイ!?
というわけでおやすみ」

episode 20 魔王アリエルとの戦い

さて、前回のあらすじ！

一つ！

魔王アリエルに首だけにされた蜘蛛子はとある領土に流された！

二つ！

それを追いかけて新たな仲間と共に蜘蛛子と合流！そして、蜘蛛子が原因で戦争勃発

！

三つ！

責任を取る形で、イチヤモンつけてきた敵軍を壊滅！そして魔王アリエルが参上！

どうなるepisode 20！

とまあ、オーズ風にあらずじしたわけだけでも。

進化し終わってたら蜘蛛子さん劣勢。

どうやら周りに結界が張られているらしく、ラーズとライラ、マリユーフは入ってこれないようだ。

「なら……蜘蛛子！ チェンジだ！」

「え!? あ、お願い！」

結構疲れている様子の蜘蛛子。

アリエルは面白そうな顔をこちらに向ける。

「へえ……強そうだとは思ってたけど、殺るの？」

「ああ。それに、一度戦ってみたかったしな」

「な、内容が完全に戦闘狂じゃん……」

…蜘蛛子の言う通り、戦闘狂になってるな。

ロボになっても性格に影響させるのか……だがまあ、蜘蛛子やラーズたちを見てたらそうなるのも解る。

だがしかし、それが今の俺。

それに全てが変わったわけではない。

少なくとも、蜘蛛子も俺もラーズもあまり転生前とは大きくかけ離れてはいない。

「ガンダム・バルバトスルプスレクス！行くぜ！」

「いいよ……来な！」

刀を持ち、腕と刃がぶつかり合う。

それが1分ほど続いて唐突に口からビーム。

もろに食らった。

「終わったね……っ!？」

「油断大敵ッ！」

腕に刀を叩きつける。

が、軽く傷を与えただけに過ぎず、まだまだだ。

「……………結構な威力だったはずだけど？」

「俺には魔法攻撃はほぼ効かないぜ。あと物理もかなり軽減されるから、すぐには倒れ

ねえぜ？」

「……………なら、本気で行くよ！」

「おうさ！バルバトス、全部解放するぞ！」

ガンダム特有のツインアイから、赤い帯がまるでマフラーのようになびきだす。リミッター解除したバルバトスと、本気になったアリエルとの真剣勝負が始まる。

ほぼ壊滅状態の敵軍の死体や負傷兵たちを巻き上げて生き残った者に確実に死を与えながら、衝撃波があらゆる方向に飛ぶ。

「シッ！」

「クッ！」

テイルブレードで死角からの攻撃を織り混ぜながら壮絶ともいえる肉弾戦を行って

いた。

武器はアイアンネイルとテイルブレードで充分。

バトルメイスや刀は逆に邪魔になるだけだ。

一方のアリエルは見る限りだと若干苦しめな様子。

こちらら機械なので、叩かれたり腕を切り落とされたりしても痛くないから怯えることもなくこちらは攻め続けられる。

「四方からの攻撃……こりやスゴい……」

「ふむ、やはり蜘蛛子の片割れが中にいるみたいですねあ」

「!!」

「後で出してやるよ。これでもこんがり肉同盟だろ?」

「いや、そんなのいぞ!」Σ(。ロ。(Σ(。ロ(

「え?そんなんですか?」(ΦωΦ)?

「バルバトス様!私も入れてください!」

外野が色々とスゴいことになってるが……………マリユ、尊い!

「余所見してる暇あんの?」

と、ギリギリ攻撃を回避。

「おっと……それじゃそろそろー」

「させない！」

「決着を着けていこう。ジ・O！」

まずはジ・O。

ビームサーベル四本による連撃で、相手を圧倒する。

「焼けてる……!?!」

「ビームだからな！魔法攻撃は防いでも、熱をガードまではできまい！」

「ちつ……まだあ！」

「マスターガンダム！」

お次はマスターガンダム。

「ダークネスフィンガー！」

「ガッ!?!」ボカン！

頭をがっしり掴み、爆破。

まだ生きている。

まあ、ここで死ぬならその程度の魔王だ。

「やるな！れっきとした魔王じゃねえか！」

「私はっ……まだっ……ここで！」

「ガンダム！」

シンプル・イズ・ベスト。

ファーストガンダムに変わった俺は、ガンダムハンマーとスーパーナパームを使う。

「結界で魔法を使えなくしてはすなの……！」

「残念だが、俺の魔法は単なる製造だ。どうやら、簡単な魔法に入るみたいだけど……まあ、細かいことは気にするだけ無駄か」

ガンダムハンマーを避けるアリエルだが、次の瞬間スーパーナパームに体を焼かれる。

「ぐう!？」

皮膚には全くと言って良いほど、焦げ目がなかったが服は若干焦げたみたい。

「ガンダムヴァアサーゴ！」

今度はガンダムXに登場する悪役の機体になる。

「メガソニック砲！」

「まだだあ！」

パンチが顔面に入るが、全くダメージなし。

というか、いつの間にかようやくサイコフレーム機体に進化できるようになった。

「うらあつ！」

「ぐああああー!？」

ソニック砲のビームが、アリエルの胴体を直撃する。
派手に吹っ飛ばされるアリエル。

つーか、いつ見てもヴァサーゴのメガソニック砲の発射形態はグロデスクさがある
ね。

「……………クスイ…三 ガンダム」

これで、そろそろ戦いはお終いだ……………

―管理者Dの部屋―

「……………嫁にしてえー!!」♥

テレビ画面に映し出されているのは魔王アリエルと激闘を広げるバルバトス様もとい、バルバトス神（↑ちやうわ!）。

「……………やっぱ、王牙君、蘇生すれば良かったかな…………でも、転生しなかったらこんなになくなってなかったし……………ムムムム」

と、マイダーリンこと操騎^{アヤキオウガ}王牙の様子を邪神らしくない物言いで悩む。

いや、そもそも恋で頭を悩ませる神様の時点で最早青春してるともいえる。

以前からその様子を見ているので、解ると思うが彼女は我らが主人公にゾッコンで惚れているのである。

彼女のにはいつの間にかというのものもあるが、やはりその人柄にも惹かれてる事を認識して以来、若葉姫色としてだけではなくただの乙女として主人公のことを愛してやまないのだ。

尚、ヤンデレの気がありそうだと感じた方はご明察。

彼女はハーレムに関しては何定的な考えはなく、逆に自分を愛してくれるならハーレムも良いだろうと思っっているくらいだ。

なので、彼女を裏切らなければ主人公は安泰である。

……頑張れ、主人公。

我々の命の運命は君にある。

「はあ………私も行こうかな………初めてを早くあげたいよお………」

…若干、いやかなり主人公の貞操が危ないがどうせ美人に卒業させて貰うのだから、世界としても些細な事である。

本人はそうは思わないだろうが。

それと、彼女の部屋の棚に王牙の所持品や写っている写真が飾られているのを、第三者が見れば完全にヤバイ奴だと悟ることになるだろう。

episode 21 革新の始まり

俺は魔王アリエルを見据える。

「いったあ……」

俺はビームライフルをアリエルに向ける。

とはいえ、もう戦意はないように見える。

「まさか魔法も物理もほぼ効かないなんて……チートの塊だねえ……ケホツケホツ」

「……俺が異常すぎるだけさ。それに、こちとらファンタジーの定番の魔法が使えない俺としちゃ、君達は魅力過ぎる」

「ゴホツ……それは……傲慢すぎやしないかい？」

「かもな。でも、転生したなら魔法使いたいわ……」

まあ、製造したりとかのやつで楽しんでるけどね。

「さて、どうする？ 殺しても生かしても俺は良いんだけど」

「……はあ……やめたやめた！ もうこんなの勝てる気もしないし、完全に体担当に人格が融合しちゃったから戦意も出ない！ とゆうわけで、停戦しない？」

「……停戦というより、講和とか和解で良いだろ……まあ、少なくともそれでもおー」

俺は良いけど、そう言おうと思った瞬間だった。

あの国の方向に、何か嫌な気配を感じた。

世界の悪意のような……嫌なプレッシャーを。

「……?どうした……ってアイツか……」

「知ってるのか?」

どうやら知ってるみたいだな。

「アイツはこの世界を滅びに向かわせてる一因でもあるし、そうじゃなくてもアイツは殺さなきゃダメな奴だ。でも、私より気付くってどういうこと?」

「知らん。なんかピリッて……まさか?」

「??」(。D。)?

可能性はないわけではない。

しかし、機械である俺にそんな能力があつて良いのだろうか?

しかし、先程の感覚は第六感が働いたと言わんばかりの感覚。

初めてだし、しかも視えた。

未来の一部を。

「アリエル。背中に乗れ。大急ぎで向かう」

「オッケー!」

何だか軽いねえ……いや、融合したからか。

メガンダムなら音速に言ってもおかしくないほどのスピードを持っている。
いや、実際持っている。

宇宙世紀初の単体のみで飛行を可能にしたモビルスーツ、メガンダム。
メガンダムの後継と称され、実際それに匹敵する活躍をしている。

彼、ハサウェイ・ノアがしたことはアムロがどう思うかは想像しにくい……少なくとも

とも、ハサウエイは彼の意味で革命を起こそうとしていた。

俺はそう思っている。

して、ここはあの領主さんがいる国。

そこには逃げ惑う住民と、それを追いかけて兵士を殺し尽くす敵国の兵士。

機械操作によるファンネルミサイルで、時間稼ぎをするが逃げ切れるかは彼女ら次第。

しかし、こんなときにエルフが乱入するとは……………やはりこの世界のエルフは敵か。

「ポティマス……………ね」

それがエルフたちのリーダー。

背中で目をキラキラさせる魔王から聞いた、敵の名前。

しかし、今は深く考えることもできない。

一刻も早く向かわなければ。

ちなみに、蜘蛛子はいつの間にか死んで、どうやら彼女は最後の秘策を使ったらしい。

彼女の反応が、向こうからする。

『メラゾフィス……………娘を頼んだぞ……………』

「くっ!?!」

頭の中に響く、領主さんの声。

まさか……いや違う！

「……………否定しても、死んだものは戻らない。それくらい、解るでしょ？」

背中に乗るアリエルが俺の動揺に気付いたのか、そう言った。

そう言われて俺は少し冷静さを取り戻した。

「…すまん、ありがとう」

「礼を言われる程じゃないよ」

ちなみにラース、ライラ、マリューはあの戦場に置いてきた。

彼らには軍を率いて、民衆を避難・守護させてもらうように言っている。

しかし、別動隊が本命だったとは……………

文句言っても何も変わらない。

俺は領主の屋敷に突撃した。

屋敷の壁を突っ込んで破壊した先には、首がないアラクネに進化したらしい蜘蛛子と、そばにメラゾフィスと呼ばれていた領主さん達の執事。

近くにはエルフの死体があり、どうやら蜘蛛子が湾曲の魔眼で殺したようだ。

「バルバトスー！」

蜘蛛子が喜ぶ。

俺も無事を確認できて内心安堵するが、その瞬間意識が落ちた。

「は」

は？

再起動には時間はかからなかった。

とはいえ、急に機能停止になるなんて……

「ふむ。君がかの有名なバルバトスか」

「どうやら言語機能に支障があるのかな？」

「な!? バルバトス! 大丈夫なの!?!」

「(ピー) ……何とかなった。クソ! 何をした!?!」

「妨害の魔法の結界を展開しただけだ。しかし、まさか魔導兵器が自我を持っているとは……バグか?」

「な、に……?」

「とりあえず、君はこちら側に来てもらおう」

「させると思う?」

アリエルが変形した腕を蹴飛ばす。

「つーか、あれって銃なのか!?!」

顔もなんかよく見ればなんかターミネーター!?!

「俺と同じ……ではないよな」

「少なくともタイプは違う。とはいえ、君のような存在は私の記憶には存在しているのを確認している」

「そうかい」

「ふん!」

アリエルがポティマスのボディをあつけなく破壊する。
意外と脆いのか。

「いずれ私は貴様らを倒す……！」

「あつそ」 グシヤ

首だけになったポティマスを、アリエルは足で踏み砕き、物も言わない鉄屑になる。
にしても、同類に会うとは思わなかった。

場所が変わり、とある平野の道。

ラースたちも戻ってきた。

どうやら何とか別の場所まで逃げ延びたらしい。

俺と蜘蛛子は領主さんたちの墓を屋敷の庭で作り、冥福を祈った。

日本式なので、アリエルは不思議そうな目でこちらを見てたが。

いや、体担当に人格が融合しちやったんじゃなかったのか？

……記憶まで融合してないってことか？

知らんけど。

「で、君達はどうすんの？」

「俺達か？」

アリエルにこれからを聞かれる。

そう言われると、俺も蜘蛛子たちも悩みどころでもある。

「ないなら私のところ来る？アイツはきつとアンタたちを必ず殺しに来るよ。特に君」

と、指差されたのは俺。

「まあ納得だな。相手がロボなら、俺をどうにでもできそうだしな……」

「……最初は君をポティマスの仲間かと思ってた」

いや、唐突に重い話やめい。

現在進行形でも重いけどさ。

「でも、君を見てたら全然違う。だから誘うんだよ？世界を救うヒーローにならないか

い？」

「ま、確かにポティマスって野郎はクズみたいだし、手を貸してもいいね。蜘蛛子とお前らもどうする?」

一応、後ろのやつらにも聞く。

「俺も行くさ。俺だつてどこも行く宛は………ない訳じゃないけど、まだまだ旅したいつや」

「私はバルバトス様に付いていきますよ!地獄だろうが、水の中、火の中でもお供します!」

「ま、マリューも行くよつ!マリューもバルバトスさん、好きだし!」

「まあ……私も行くよ。私だつて………な、何でもない!」

………何だか一人命懸けな奴がいるが、皆も行くみたいだ。

「んじゃ、行くよ。あ、それとメラゾフィスさんと……ソフィアはどうする?……いや、俺達と来た方がいいと思うが、どうする?」

脇にいた二人に、俺は聞く。

アリエルも勧誘するつもりだったらしく、アリエルもメラゾフィスを見る。

まあ、省略させてもらおうと彼らも行くことになり、俺達はこの国を去った。

「……………にしても、めっちゃ可愛いな。蜘蛛子……………いや、そろそろ名前は変えた方が良
いかな?」

「え?ちよっ!?!?／／／」

『……………はよくっ付け』

メラゾフィスも思わず突っ込んでしまう程、甘かったようだ。

「とゆうか、魔王少女アリエルちゃんとか笑えるな」

「しょうがないでしょ!体担当なんていう奴のせいだし!」

「……………あの白い蜘蛛の女、絶対に殺すことにしよう。そして、あの魔導兵器……………モビルスーツタイプのあの進化は独特だな。絶対にデータを入手しなければ……………」

とあるファンタジーには全く似合わない、鉄の部屋でポティマスが入ったカプセルから出た一人……………いや一機のポティマスは、そう誓うのだった。

そして服を着て、とある部屋に入る。

そこには、二種類のロボット兵器が置かれていた。

そして、一機だけ怪しく单眼^{モノアイ}を光らせた……

episode 22 管理者Dの招待状

side 管理者D

……彼が魔王アリエルの仲間になってから数日。

アリエルと模擬戦をしているみたいだけど、どうやら伸びが悪いみたいだね……なら

！

sideバルバトス

「むう……レベルが上がらん！」

俺はレベルの上がりに伸び悩んでいた。

だって、リガンダムになってから頑張つてレベル上げをしたが、ユニコーンガンダムには到達できず、今はヒーリガンダム。

MSVの重装備リガンダムも手に入れたが、このままでは世界の終わりを延長できない。

少なくとも、あの声はシャギアなあのクソエルフをムッコロさなければ……

それ以前に、俺に覚醒ユニコーンになれるかどうかだ。

そんなときだ。

まるで某ハンティングゲームの依頼状みたいな紙が、狙ったかのように俺の顔に張り付いたのは。

「わふっ！」

唐突に顔面に張り付いたもんだから驚いた。

剥がして見ると、完全にあれだった。

しかし、招待状……嫌な予感もするが彼女は嘘は今までついたことはない。

「やってみるか」

ビリッと、ミシン目を破った。

しかし、俺は忘れていた。

蜘蛛子に、このことを話すことを。

話しておけば、後々あんなに怒られることもなかっただろうに……

破いたら空間転移して、宇宙空間にいた。

「……………スサオノ？」

目の前にはダブルオー〇〇に登場するモビルスーツ、スサオオ。

「イザ勝負！」

グラハムの声があるが、どこか無機質だ。

まあ、コピーっていう感じなんだろ。

「AGE——！」

俺は機体をチェンジしてAGE——になる。

相手も動き出す。

「ドツズライフル！」

ドツズライフルを錬成する。

「当たれ！」

三連射。

しかし、外れるものは外れるからにして全て回避された。

最後のはちよつとかすつたけど……

「タイタス……………いやスパロー——！」

俺はAGEシステムを起動して、パーツを変える。

AG Eシステムで俺の能力を向上させ、新たなパーツを作り出してくれるこのシステム。

最近はアリエルとか蜘蛛子でやりまくったから、AG Eシステムも伸びがなくなり最近では使わなかったが………ちようどいい！

「加速するぜえ！」

シグルブレイドを抜刀。

相手もこちらの加速に追い付くためか、「TRANS—AM」を起動させる。

「落とす！」

「ヤルナー！ガンダム！」

シグルブレイドに俺の体の重量と加速を加えて、スサノオにシグルブレイドを叩き付ける。

少し、相手のGNソードと拮抗したが斬れた。

短時間だが、切れ味はGNソードにも負けないシグルブレイドはそのままスサノオの頭部をはね飛ばし、俺は体を反転させてさらにもう一撃、胴体に叩き込む。

「ナント!?!」

「スパローの性能のおかげだな……」

スサノオが爆散。

俺はスパローの性能に感謝すると、また紙が。
………スサノオチケツトってなんだよそれ!?
やっぱりミシン目があつて俺はそれを破つた。